

候事に候去乍猶又とくと勘考致し候處中將殿を承り候三條趣意烏丸申され候事も候まゝたとひ 叡慮はいか様にても三條いかゝ存られ候や其邊心配いたし 〴〵 今日迄は未三條より何とも承り不申候しかし是は私かゝんかへ候は先月十四日三條へ 勅答申入候節何れ名代にて申上られ候よし申居られ候其後とふか穂波とやら西四辻とやら上京候様子に承り候まゝ其人により私申上候趣申上候上ならては表面仰出されには成申さぬに候やと存 〴〵 何分にも此場合にては

叡慮にて仰出され候ともやはり御猶豫願候方條理相立候事に候や御請申上候ては不都合に候やもし 〴〵 始終全からざる様に三條存られ候ては心配の事に候淺はか成心には其意味辨兼候まゝ御請の様藤よりの返事に認させ候へとももし 〴〵 條理相立申さぬ事にも候はゝよろしく御取つくりにて御申上の様御頼申入 〴〵 私は何れにても條理相立候様致し度存念に候まゝ内々右の邊御尋申入 〴〵 御あつき

叡慮にて上京出來候はゝ私に置ては忝り 〴〵 事に御座候扱は駿州請取に近日當家家來出立に成候よし付ては都合次第龜之助は引移候事に候付ては私住居の處當地にて當館にても外にても願候てよろしきに此程三條も申居られ候實は兩寺の事仰出されも候まゝ直に願出候つもりに候へ共未御沙汰も有らせられす候まゝ申出さす候へとも龜之助移に付ては願出候方よろしくやと存 〴〵 しかし何れの屋形にても先當分の住居こと願出候つもりに御座候先達私進退の事御沙汰も伺候へとも少々私には分り兼候處も候へ共是は上京も出來候はゝ其上にて伺候心得に候右故當分と申出候方よろしくやと存 〴〵 右の兩條共中將殿へも御相たん申入度候まゝよろしく御申傳御頼申入 〴〵 何卒早き方に御返事承り度存 〴〵 住居の事は様子により候へは御返事承り候迄に申出候やも計かたく候へとも先御相たん申入 〴〵 〴〵 彌上京にも候はゝ誠に御苦勞 〴〵 乍中將殿は下向の様偏に御頼申入 〴〵 〴〵 烏丸へ此比は頼居候へ共上京の事

は正親町へ相たんの方よろしくや是も御相たん申入りまつは用事計
あらくくかしく

返すく時かふ御用心の様存り中將殿も直に下向の事と存居候處
此間三條に承り候へは御用あらせられすは其儘歸京のよしに御沙汰に
て申され扱く力を落しり家來共も大にく力落しりめて度
かしく

文月六日認

静寛院

はし本大納言殿へ

上封書

参る

八月七日著

○

御別紙に仰入られ候大樹様御所勞かるからぬ御事に付此程醫師御すゝめ

の御事も御急便にてわさく御願も遊し候處其後追々御便りにて御容體
申参り中く容易ならず大御心配にて日々いろくと御評義のまにあらせ
られ候内とふか追々御容體御さし重りとの御事にて何ともく仰られ様
もあらせられぬ御次第にあらせられ候右に付萬々の御事あらせられ候
節は和宮様にももはや御入城より五六ヶ年も相立其上御縁組の御譯柄
も元來天下の爲にとの御事にもあらせられ候まく此後とても行とくかせ
られすなから御爲にも相成候御事にも候へは御身上に思しめしはあらせ
られす此上は萬々の御事あらせられ候節は御薙髮遊し幾久敷御供養う
もあらせられ度御決心にあらせられ候まく此段仰上られ候御所にも思
しめし様はあらせられすとは思しめし候へとも先く右の御事仰入られ
候くれくも御決心にあらせられ候儘さ様思しめし進せられかならずか
ならず御案事進せられぬ様よろしくく御さた御頼まあそはし候右御決
心に付御戒師何かの御事今く仰入られ候もいかくなから御遠方の御事故

私に御内々伺定候様にとの御事におはしまし候別紙に一々認伺
 御早く御治定にて否御返答伺度よろしく御沙汰御頼申入り
 何分にも御相續人様いまたあらせられぬ御事にて扱も御心配のま
 そはし候實は昨年御進發の節極御内々御養君の御事 和宮様へ仰置れも
 あらせられ候へとも誠に御幼年故仰置れも重き御事ながら御時節か
 ら御幼年いかと唯々御心配にあらせられ候是は誠に御内々仰入られ候
 故御まへ様をひそかに御さたの御事御頼あそはし候實に思しめしかけな
 き御大病夫も御早く聞せられ候へは御遠方ながら何とか御世わ様仰進
 せられ候半せめては醫師御療治にても御十分に御手を盡され候半に御ヒ
 の御療治も實に御不安心成御事とも此儘御病症さし重らせられ候ては御
 壽命と御あきらめも出來られす御残念仰盡されかたく餘りの御事に御當
 わく遊し何の御かん考も出られす只々御心配遊し候先々只今の
 處は御氣もはらせられ御格別の御動もあらせられすふかく御案事様あら

せられぬ様よろしく御さた御頼申入り伺事一々落なく認候心
 得に候へ共心もやの上當りつけぬ御事にて伺落しも難計若く思し
 めしつかせられ候御事もあらせられ候は御伺にて御加へあそはし下さ
 れ候扱々存もよらぬ事伺候事と實に何とも申上様無次第た宮
 様御心中御察し申上恐入候やう御案事申上り心中御察しかしく
 あそはし下されケ様に認居候内も目くもりさたかに見へかね別して御
 分りかねあそはし候半御推らんにてよろしく御さた御頼申入り何
 分にも御早く御返事願度存此間御願の醫師の事も跡へんに相成
 候事と御残念限りなく思しめし候何もよろしく御頼あそはし
 候あらしくかし

七月廿六日認急用

宰相のすけ

大典侍様

人々まゐる御内々も有

○ 萬々一の節心得にケ條にて伺上候事

一 御薙髪様に御掛いまた御再興はあらせられぬ様存上候へ共いかゝや若
く御色目もあらせられ候得は伺度候事

一 御袴の御色目紅柑子萱草の内何れのかた御よろしく候や當時天璋院御
方は紅本壽院御かたは萱草御著用故とふか先く萱草のかた餘りよろ
しからぬかたは御もちゐに相成御座候やと存上候儘一寸く思しめし
を伺候へは先く柑子か紅兩様の内御定メ御戴遊し度との御事にあら
せられ候何れ共御下ケ札にて伺度存上候事

一 御戒師輪王寺准后様へ御頼に成らせられ候てはいかゝや先々伺上候事

一 天璋院御かた御薙髪の節は御院號實近衛様より御廻しにて夫を輪門様
へ御廻し更に輪門様を御あけに成候由夫計にて何もく御作法と申て
は御座無唯々天璋院御かたのおほしめしにて刺髪の者に御髪御切せの
よしに御座候此度とても御戒師輪門様へ御頼に成候ても中く御参り
にて御作法などは出来られす候まゝたとへ御戒師御頼に成られ候ても
御院號御上遊し候位の御事やと存上候いよくさ様のせつは餘り俗人
にてもいかゝ故刺髪致居られ候上々婦分にては御髪御つませ遊し候や
又御附の上々婦上られ候て御よろしくや夫なれば御手かろにて御都合
は御よろしく候へとも俗人もいかゝの物や一應伺候否の處御下ケ札に
て伺度存上候事

一 御髮先はとふか御當地にゐは御棺へ入候由に御座候事

一 御忌服の事御當地にゐは三十日に十三月にて御座候由夫にてよろしき物や京地にゐは矢張五旬十三月之様心得候へ共たしかならず伺候事十三月も若や日限りにては無や矢張御父母御同様にて十三ヶ月め一日に御清め御よろしくや御下ヶ札願上候事

一 御素服も被召候半やと存上候儘召れ候御かたに候は、昨年に通に其御地にて御申付御世わ卿より御廻しに成候様御取計御頼申入候其せつ御服御帶の類いか様の御品御よろしく候や御品により候ては當地にて御出来御間に合かね候まゝ御一所に御申付御廻し御頼申入候平絹又御帶など黒しゆ子白りん子などの類に候は、御廻しに及不申候事

一 五旬の内御かいとりは地紋あらせられ候て御よろしくや又平緋は無地綾などの内御よろしくや伺候事御跡十三ヶ月も其通にて御よろしくや否御下ヶ札願上候事

一 御袖留の處御ひろう被成候上の方御よろしかるへくや又御容體中に先く御袖御留遊し候方御よろしくや當地にての御都合次第思しめし様もあらせられすや伺上度御下ヶ札願上候かねて伺置候は嗣子 御しん御はらひ申上候様との御さたなからか様の御次第にての御事故上々婦上られ候て御よろしくや矢はり嗣子上候や是も伺度候事

一 天璋院御方は五十日 御中陰明にて御薙髪の由なから此度 和宮様にはいかゝ御よろしくあらせられ候半や其邊も伺上候事

一素服御申付も御承知の御事ながら萬々一の上御ひろう被成候上ならては御申付出来不申念の爲御内々申入置候事

一城内御穢に相成候節は私共の處頓と別火には致候心得ながら迎も京都の様につきはり清くわかち居候と申事は出来不申候故其間は橋本家へ出し橋本家々野宮家へ御廻しに成候様致御用事は伺候半やと存候事

七月

宰相のすけ

大すけ様へ

伺書

中山忠能履歷資料 卷九

一 池内大學の件に付書翰

文久二年正月廿五日

御違例如何御保養專一存候然者別紙今朝門ニ張有之状箱の中ニ一封在之上ニ池内大學ニと書付有之候不淨も難計故未及聞見候へ共どふも難計此頃人氣不和實ハ色々過日來も承候内仲間中ニも不居合ニ而彼是御互之事ヲ申候人有之既ニ過日別當々戸田へ心添之話も有之候何分此儘出仕候共人心不服と存候一體迎も力も難及故過日引籠居候事ニ候如何御勘辨哉賢考承度存候此間々退隱之方と内決仕居候事ニ候御考慮承度存候實ニ人心不服ニ而は猶更迎も難行候何も御答教希入候也

正 廿五

(原朱書) 右正親町三條自筆

二 中山忠愛より長土一件に付問合書

文久二年二月一日

機嫌能被爲成珍重奉賀候然者長土の一件模様少しも相分り忠光へ申出候哉一昨日昨日も不成心御様子伺度存居候へとも忠愛一昨々夜々俄々熱出風邪平臥少しも頭上り申さす今朝ハ少々宜方仍先御模様伺候將又右兩藩へも忠光の此事柄分り候迄ハ中山家へハ歸宅不仕と申入置候事之由尤實事ニ候哉伺度候將一昨朝良節可來申越候處殿下被召候儀ニ付一兩日大多用一閑無之候ニ付兩三日之内可來申越候何分御模様伺度早々如之候也謹言

二月一日當賀

言上

忠 愛

三 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年二月十二日

兎角難揃時令之處彌御揃御安泰恐悅存候御痛所御困之由如何御無音心外恐入存候猶御用心專一奉存候扱一昨日は御細書之處不能拜答略儀を以野殿御答申上甚混雜失禮御海恕奉仰候其節御承知之條々東武御挨拶向之儀も緊要至當之儀計ニも無之哉とも奉存候へ共始末之儀且ハ御沙汰之事夫々被行候事に候右は兩朝臣も内奏之次第も有之候事に候一昨日兩朝臣被召於 御前御褒詞眞御太刀正永作賜之候具朝臣堅固に御内々

黄金 一枚 御卷物 一

右別賜有之

一是迄老中勤役之輩再勤之義も可有之候へは一應以前御内慮可伺申旨兩朝臣の若州へ可相達旨同御直命有之候昨日直ニ可被達趣ニ候右ハ全御讓國一條先輩之頃其沙汰も有之由於東武兩朝臣承候儀ニ付當時勤役之老中ハ御安心候へ共再勤

ニハ此度大樹公老中等ニ御請も反古ニ相成候ハ御心配と申邊ニ被仰出候御趣意ニ伺候

一昨日武傳二條行向一昨日御沙汰書可達ニ處所司代風邪難出會ニ付行向ニ振ニ以封中被達候由猶自被返答と申事ニ趣ニ候

一神鏡懸替日時定陣今日未刻に相成

神宮と剋限替りニ相成候貴意御尤ニ拜承候

一御神樂昨日奉行南曹被仰出内勘文召候廿一二三と申勘進ニ候昨夜退

出迄は未御沙汰不被仰出候

以上承知仕候分言上候

一過日御内話申承候此度公武御一和周旋ニ事於關東加恩ニ儀

久我 御 廣 坊 世 愚

○岩 ○千 ○富 殿 新大典

○少内侍 ○右衛内

右ニ通ニ様ニ承候夫ニ付此頃御婚禮濟ニ上可有沙汰哉左候ハ役人夫々要路ニ向ニハまだしもながら夫迎もいかゞの事況圓印五點ニ分ハ偏ニ御愛物ニつゞきのみ故右等迄も及ひ候テハ全御不明ニ看板を上候譯ニて實ニ難忍事何とか防止度旨日來具朝臣内談西澁卿も被談置候ハ共はきと致し候事も無之因循消光ニ内ニハ可相發哉實ニ難耐旨一兩日來具朝臣内々段々被示候至當ニ事ながら良策元より無之下策さへも無之彼朝臣智略有之度段申談候ハ共品々同人ニも差支其内和朝臣専ら日夜右加増を被待居候處故夫ヲ奸朝臣ハ申出止之候ハ實ニ難澁ニ旨故手段難絶由に候何方も同様申居候ハつまらぬ事故御内談申上候何とか賢考御裁判希上候眉火ニ急ニ成候由ニ候

右等申上度如此候
一今日拙子當番ニ處一兩日風邪今日は平臥故無餘儀今日大藏卿ハ相頼大藏參番ニ候明日平卿當番故十四日御參番ニハ加勢ニケ日御受故書記

ハ小子可仕候間十二十三等二ケ日之處加勢帳之儘ニ御除置希上候此
段御斷旁申上候也

二十二

叟

固大君

極内

四 橋本實麗より中山忠能宛書翰

文久二年三月廿三日

追申早々麓答恐入候

且市中觸拜借旁如此候也

過刻者尊書之所對客中不捧即答失敬恐入候彌御安全恐賀候扱先時御示之
儀略風聞ハ承候へ共觸書ハ未不見及候御手元ニ被爲在候ハ、何卒暫時拜
借之儀願入候 和宮御上洛之儀毎々申出候へ共頓と埒明不申三條ニも甚

困居られ候御書之趣之騒動ニ候ハ、片時も早く御上洛相成候様いたし度
候尙又三條へも申入候事ニ候迎も御行列杯と申場合ニて無之候唯々御上
洛肝要之事ニ候被掛御心頭委曲之御示畏入候仍御請旁如此候也

三月廿三日

實麗

中山殿

奉答

三廿三ヌム

五 所司代酒井忠義より廣橋光成坊城俊克宛書翰

文久二年
四月十日

頃日道路之風説を承候處西國筋之浪人共多人數兵庫大坂邊に集彼是不容
易暴論を唱候趣に有之尤支配國外之義に付巨細之義は難相譯候得共全く
虚説而已に亦も有之間敷哉就るは官家方々諸藩士等へ御直談之儀は兼而

御規則も有之候事御承知之儀とは存候へとも萬一御行違之廉も出來自然
去る午年八月八日之覆轍ヲ踏候様之義有之候は以之外之御次第ニ可至
と深御案思申上不堪苦心内々申上候既ニ此度格別之

御縁組も被爲在 公武之御中御一和之上之御一和ニ被爲在候處只今聊ニ
も御異論之筋相生候は實以 公武之御爲不御宜候義ハ勿論東西諸臣
に有之候も深々恐入可奉存事に御座候必々卒爾之御所置無之様仕度奉
存候此度浮浪之輩暴戻之説を唱候由に候得共奉對

天朝動干戈候様之義ハ普天之下率土之濱如何様卑賤之者と雖人心之固有
する處決有之之間敷義に御座候間必々 御驚動被遊間敷奉存候乍併反逆
野心之徒有之萬々一於

王城地動干戈惱 宸襟候者於有之者私所司代役相勤候限は若州一國之力
ヲ盡し候者勿論諸家御警衛之者共を指揮致し誅伐可仕候間 御安心被遊
必々御輕易之御取計無之様仕度奉存候是全 公武之御爲盡微衷候儀ニ御

座候右之段決テ表立申上候義ニハ無御座候得共全々御爲筋を存上御兩役
方限り内々申上置候義ニ御座候事

四月十日

忠 義

廣橋 一位 殿

坊城 大納言 殿

(原朱書)
右中山自筆の寫

六 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年四月四日

今朝御細書拜承仕候御安全恐悅存候然は二冊返給正に拜受候扱其後先
異變ハ無之候西側へ長井ハ内談は昨日行向龍章を以應對數剋に及ひ近
日龍章長井面談に相成候又所司代邊打合も托置候
一朝議之事猶拜談願入候

一 艸案兩人少々勘考有之先剋被示候明日可申上候明日御伺定願上候
一 今朝兩人堀面會有之明日可申上候先長論同意に聞へ候
一 昨日龍章長井鶴岩等往復どふも手離れ兼申筋斷申入候事に候
以上明日拜面萬々可申伺候也

四月四日

叟

固 大 公

内々

(原朱書)
右嵯峨實愛自筆

七 四人加録の件に付中山忠能等連名書翰

文久二年
四月七日

戊四七

過日極御内々相伺候 四人自關東以思召加祿之儀不肖之者共不存寄沙汰誠

以恐縮候然處右者何等之賞ニ候哉難計候へとも多分和宮御縁組ニ付而之
事哉と推察仕候右御用ニ付而ハ拜領物も仕候儀且又和宮御下向後御都合
之處も今一段御双方御安心と申御場合ニも不相伺實ハ乍内々恐懼彼は心
配仕居候時節ニ候間右等拜受仕候而は實ニ不本意深以心痛仕候何卒恐入
候へとも御沙汰止ニ相成候ハ、乍恐安心深以恐入併是非御受不申上候而
ハ難濟儀ニ候ハ、何卒萬端御都合ニ相成候迄之處所司代ニ而も猶豫に相
成候様成共御内沙汰之御事貴重にも相願上度存候此段恐入候へとも内々
希上候事

忠 能
實
雅
通

千種少將岩倉少將中務大輔等内々申願度段申立候頃日承及候へは自關東

以思召加録被申付候哉之由に候右は何等之儀に候哉難計候へとも何レニ仕候も右實説ニ候節ハ理外之儀故衆人之傍難目前ニ而寔迷惑心配仕候間何卒右様之儀無之様兼而希上度由申候併一端被申出是非御受取申上候者不相濟事ニ候ハ、何卒々々先當時之處は所司代ニ而も猶豫見合ニ相成候様成共相願上度由に候右之趣再三申出候間極内々言上仕候事
（原朱書）
右中山忠能自筆

八 廣橋光成より中山忠能宛書翰

文久二年四月十日

追々段々御丁念之御示何も拜承候也

彌御安全珍重候抑昨夕者芳翰畏拜見候此間御内談申入候關東へ御使人體之儀猶今一應御沙汰被爲在候由示給令拜承候可捧即答之處無據儀取掛失敬ニ相成候乍延引御受迄如此候也

四月十日

受

光成

中山大納言殿

九 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年四月十二日

先刻寛拜畏入候爾來御安全恐悦存候然者御申上且近邊も御申遣し重疊恐入存候二紙正拜受候猶可取計存候扱存外一條御心痛恐察候島様子分り候ハ、可申上候右ニ付御進退之處方今時勢一日も御引ニ而ハ人心却而騷擾ニも可及歟且ハ彌疑念も可有之只々御締り方御急務と存候尊體には御頓着無之様願入候其邊小子相含先刻も精々申述候事ニ候必御遜退無之様ニ祈入候先御請如之候也

四十二

内容

叟

一〇 中山忠能より正親町三條實愛等宛書翰 文久二年四月十二日
御安全珍重存候抑別紙二通被示候條恐入進覽候早御回覽可返給候右に付
ゐは一應拜談も仕置度候間明十三日午頃一寸御參集願入度候仍先申入候
也

四月十二日

忠 能

三條大納言殿

承候明日午頃
可令參仕候

飛鳥井中納言殿

承候明日は參番にも
候條拜面可承候也

久世宰相殿

承候明日午頃
可令參仕候也

野宮宰相中將殿

承候明日午頃
可令參仕候

一一 廣橋光成坊城俊克より中山忠能宛書翰

文久二年四月十二日

彌御安全令賀候然者別紙寫之通昨夜所司代より申來本紙内々上于 御前
置候御相役へも御傳覽可給候仍申入候也

四月十二日

追申別紙御傳覽後可返給候也

光 成
俊 克

中山大納言殿

一二 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年四月十五日

彌御揃御安全恐賀候昨日參拜畏入存候色々申伺大幸畏存候其後陽家出
頭面談之處幸源亞相も同席ニ種々談合有之候上ツマリハ今一應泉州
に押引有之其上之事と被決候入前左覆轍大心配之旨夫に付るもとかく
不斷ニ候家來向も色々混雜之義も有之候決定候ハ、早々可申上候

一 殿下へ參上賢息御書取差出申入置候迫黄昏候間島田へ申置候處今朝同人返答ニ入來御書取之趣に亦も格別御子細無之義明白故此上ハ無御油斷御締り向堅固に不相弛様御心添可然於拙子も御心添可申旨尤相役中へハ不及申入旨且尊公ニも御恐怖に付る者御所勞引之事も御内話之處小子御止メ申上候事も島迄申入候處尤々方今時勢決而不可然之間其儘御出仕可然旨等被答命候此段申上候尙又拜談巨細可申上候吳々も御取締リハ無御油斷様と申事ニ候

一 小子泉州面談之事島田へ無據申談無據申談候譯は拜面可申上候尤相談ハ不致決心之旨はなし候處頗同心面話鎮靜說諭可然旨即答候殿下へハ何國迄も不申上様小子決心所司代を申出候垣ハ破り候へとも殿命やぶり候てハ不相濟故是は不申上様申入置候處今朝入來彌面談可然旨申述歸り候上難去次第ニ而殿下へ申入候處殿下同心必可面談旨御内命之由以一封申越候尤左様可有之と存候此上は陽家へ申入可面會存候乍去陽家泉州打合

之都合如何と存候矢張泉州嫌疑ヲ避候様ニ相聞候夫ニてハ不面白候先此段申上候

一 富妍朝臣今朝堀面會濟次第入來面談仕候其後參上之旨ニ候間面會候ハ猶又御傳言可申上候

一 和泉十三日着伏候

一 島田一昨日長井長談辰半を申前迄其後長井所司代へ行向以三浦應接薄暮歸邸之處二更頃三浦彼長邸へ行向長談昨朝島田長邸へ向卯半を辰半迄談各懇談哉ニも被察候已刻出立之趣ニ候
先は荒々申上候書餘期拜談候也

四十五

叟

固大君

極々内々

一三 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年四月十六日

此三通只今到來入御覽候已剋御出門之旨承候御相談も申上度候事も御座候故參上御同伴可申候間御見合希上候也

四十六

叟

固大 公

今日泉州行向候事は無相違と存候

一四 岩倉具綱より中山忠能正親町三條實愛久世

通瀝宛書翰

文久二年四月十六日

堀川家ニ御待申居候定而今日泉州に被下候御書取邊哉と存候ニ付藤多も招置候可相成ハ一應同人へ申聞候上被 仰出候ハ、重疊と存候

今朝泉州口氣伺度次郎と相違も無之哉

兼而申上候泉州心中浪士口氣次郎察候邊一ツ書今朝上候心得ニ而取落候只今存書し大仰天早々上候

右如此候也

四十六

上包

中山 殿

三條 殿

久世 殿

具綱

内啓

一五 薩藩へ被仰出書并酒井忠義島津和泉上申書

文久二年四月十六日

四月十六日浪士鎮靜之義薩藩へ被仰付寫 一

浪士共蜂起不穩企有之處嶋津和泉取押置候旨先以
叡感 思召候別於御膝元不容易儀於發起者實ニ被惱
宸衷候事候間和泉當地滞在鎮靜有之候様 思食候

一翰致呈上候薄暑相催候處彌御安榮珍重奉存候陳者過日存意之旨以一紙
御兩役迄内々申述候義ハ全ク

御驚動無之爲且御心得違之向無之様ニと存候事ニ候右ニ付昨朝岩倉少將
の家來迄内話承り候處嶋津和泉御面談之邊彼是御遠慮御座候旨御尤ニ存
候得共御鎮靜筋御丹誠之義ハ誠ニ別段之義ニ當節御大切之御場合と存
候間近衛殿にも御申上御兩卿にも同人御出會兔に角當地無事被爲安 叡
慮候様ニと存候此段ハ相合居候間早々申上置候以上

四月十六日

忠 義

中山大納言殿
正親町三條大納言殿

浪士共蜂起不穩企有之候處當座之處私取押置内分御届申上候處 叡感被
思召候仍御當地へ滞在鎮靜可仕旨 叡慮之趣承知仕恐入難有仕合奉存
候精々取鎮方可仕所存ニ御座候乍併依時宜手ニ難及儀も御座候ハ、御届
申上候様可仕候先當座之處御請申上候以上

四月十六日

嶋津和泉

一六 嶋津和泉より近衛家へ差出書 文久二年四月十六日
四十六嶋津和泉於陽明差出寫 二ノ内但一紙ハ一披見而已ニ
テ傳寫堅ク理ノ由ニ候
趣 意 書

一 粟田口宮 左府公 鷹司公 御父子御鎮被爲解度於關東一橋尾張越前等御慎解有之候様被 仰渡度事

一 右御慎解之上 左府公關白職被 仰出於關東は越前中將殿大老ニ被任
度此儀ハ家格ニ付先例ハ無之筈ニ御座候へ共非常之時節非常之處置有
之候様被 仰渡度事

一 田安後見之儀名有實無キ事ニ御座候間免許有之候様被 仰渡度事

一 安藤對馬守手疵致平愈出勤仕候由是ハ第一天下之人心ニ關係仕不可然
事ニ御座候間速ニ退役申付候様被 仰渡度事

一 久世大和守早々上洛仕候様被 仰渡前件之儀速ニ取行候様屹と被 仰
渡度事

一 前件之儀被 仰渡候ニ付而者乍恐 朝廷御威光不被爲立候而者幕役共
遵奉仕候儀懸念ニ奉存候間大名二三家ハ 御内勅被相下若幕役共違
勅之趣も有之候ハ、速ニ辨責仕候様被 仰渡度事

一 越前在職之上上洛被 仰付將軍未若年ニ付非常之時節御懸念被 思召
候間一橋へ後見被 仰付於關東 朝廷尊崇之道奉盡正邪之辨明白ニ相
立外夷御處置天下之公論ヲ永以世不朽之明制被爲定 皇威海外ニ被爲
振候様相成度奉存候事

一 此以後者

一 叡慮之趣浪人等ハ不相洩様御取締有御座度奉存候事

一 浪人共之說妄ニ御信用不被爲在様乍恐奉存候事

右之條々至愚之身ヲ不顧存慮之趣申上候間厚ク御評議被爲盡御取用
ニ相成候儀ニ御座候ハ、一日も早ク 勅命被爲在度御事と偏ニ心願
ニ御座候敬白

四月十六日

上

源 久 光拜

二ノ内

四十六嶋津和泉於陽明差出寫

口上之覺

此節私儀關東に於て出府仕候趣意表通者去々年以來修理太夫儀參府兩度迄御猶豫之御禮且屋敷燒失後下知不仕候亦不相叶用向有之筋ニ御座候得共内實ハ公武御合體

皇威御振興幕政御變革被爲在候様仕度所存ニ御座候尤此儀者一朝一夕之事ニ無之去ル午年以來幕役共勅諭ヲ遵奉不仕外夷通商免許仕剩正議之親王公卿ヲ奉始一橋尾張水戸越前其外有志之大名悉禁錮仕庶人者死流之刑ニ取行候處ハ乍恐被爲惱

宸襟候御模様傳承仕諸國之人心致紛亂浪人共尊王攘夷ヲ致主張慷慨激烈之說ヲ以交ヲ四方ニ結ヒ或ハ大老ヲ刺シ或ハ夷人ヲ戮シ候ヨリ幕役共取

締之嚴令ヲ下シ候處彌奮發仕近頃ニ相成殊ニ致增長終ニ者不容易企ニ及候哉に相聞得申候右通に而は

皇國一統騒亂之基ト相成勤王之趣意ニ不相叶而已ナラス却而外夷之術中ニ陥リ候儀ニ而實以不可然事ニ御座候私儀家督之者ニ而も無御座候へ共三百年來徳川家之御鴻恩ヲ蒙リ殊ニ亡兄薩摩守臨終之節國政之儀者勿論

天朝幕府之御爲宿志致繼述精々盡力仕候様分而遺託之趣も承居候ニ付右次第傍觀猶豫仕候而者不忠不孝之罪難遁と相考修理太夫申談是非關東に於て出府所存十分建白仕候合ニ而先月十六日國許發足當月六日播州姫路に着仕候處諸浪人共追々上坂仕私通伏相待事ヲ起シ候趣ニ相聞得候ニ付道中差急候事も出來兼漸ク去ル十日大坂に着仕候處浪人多人數滯坂仕居紛々之次第御座候ニ付家臣之内内々差出其方其實ニ勤王之志有之候ハ、此方致上京

叡慮可奉伺候間暫時此地に潜居可仕旨精々理解爲仕候處乍漸承服仕候ニ付去ル十三日伏見に着仕今日參殿仕
叡慮奉伺且所存建白仕候更ニ僉暴ニ事ヲ破リ候儀ニ無御座天下之人心安堵仕候様御所置被爲在度所存ニ御座候間何卒不惡御聞取委細 奏聞被成
下度伏る奉希上候敬白

戊四月十六日

一七 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年四月十七日

日々快晴候彌御揃御安泰恐悅存候昨日ハ段々御周旋事々御厚配實以御苦勞存候全御取計御都合之御次第御互聊安心仕候尙此上之處益御丹誠之義共と奉存候扱今日御參之様相伺候彼御請書御差上ニ而巨細御申上と存候右ニ付るハ小子も參仕可仕勿論之處風邪不工合尤平時ハ不仕候得共昨夜曉更ニ及候故歎今朝之處頭痛ニ而困居候且有體申上候長藩井上小文吾北

條瀬平等今朝來談致し度由於北條ハ東武の上登直様歸國之趣何卒昨今之内と申事ニ而關東模様委細申聞候旨ニ候間是も承度とも存候旁恐入候へとも相成候事ニ而不苦候ハ、今日之處不參仕加養も仕度存候旁以恐入候へとも有姿申上先御斷言上仕候併何レニも參仕可仕義も候ハ、兩人に斷申遣し所勞相扶可令參上候實ニ恐入候へとも先有之儘申上候事ニ候尤於御承知者必々不奉勞貴答候先早々如此候也

卯月十七日

叟

固 大

公於御承知は不勞貴答内々

一八 大原重徳より中山忠能宛書翰

文久二年四月十七日

二白岩少骨折感服仕候實ニ大體之事にてハなくと存候也
薄暑之砌愈御平康珍賀候抑此度之御義昨日之御時宜實ニ御程好御都合之

旨巨細傳承候扱々恐悅愚拙例之困苦仕候折柄實ニ喜躍此事ニ候早速恐悅申上可得拜顔候へとも御用多御中御邪魔仕御儀恐入候間申置候實ニ手舞足踏ヲ不知トハ此事ニ候併是ハ追々之御事先山口之事ト奉恐悅候事ニ候猶拜顔得候ハ、萬々可申上候へとも心事申上度如此候不具

四月十七日

重 德

中山亞槐公

差置

一九 當節浪人體の者所々云々書面寫

文久二年四月十二日

當節浪人體之者所々寄集居候旨被 聞召不安 叡慮之處島津和泉御當地通行之折柄右浪人體之者爲取鎮在京逗留罷在追御沙汰可有^{虫損}□□議奏衆被 仰渡候依之今日^{松平カ}□□修理太夫屋敷ニ逗留仕候此段御届申上候

四月十七日

松平修理太夫様
御使者

伊勢勘兵衛

(原朱書)
右中山自筆ノ寫

二〇 岩倉具視より中山忠能宛書翰

文久二年四月十八日

昨日御念書之處來客中不能御請恐入存候彌御安全恐悅奉存候誠ニ一昨夜ハ拜面畏存候段々御苦勞御草臥と存候一件先々鎮靜國家大幸此事と存候泉州滞在武傳ハ廻達否之事昨日藤多面會承候處色々申居候間今日返事之筈ニ候尙其上可申上候全ク薩州ハ届方様子と存候一件若州ニも先日安心畏之由明日ハ藤多發足出府是非々々若州心配和州上京取計候由に候昨日堀次郎も來り色々申承候浪人共實ニ追々上京此頃四國蜂起哉ニ申居候

別紙昨日藤多持參此外丹州筋多人數蜂起哉之風聞是ニ惡徒虛ニ乘し候事
 哉和州の五六百も出候哉是ハ勤王一方之由
 諸浪士取押方實ニ泉州ニも心配之由又追々惡徒黨ヲ結ヒ候も難計此様子
 ニ若腹心之者と泉腹心之者と内々出會沈靜方所置之運ヒニ可相成候哉
 と存候於小子方會盟可相成と存候萬五千之段御細示恐入存候實ニ殘心々
 々に奉存候事に候
 今度之一件員外之小子彼是御使ニ相成候事實ニ恐怖之事ツク存候得
 者存候程越樽多罪之事と心配仕候得とも全ク御陰ニ愚忠も聊相達候心
 得ニ深く畏り存候全ク御兩卿御舉用給候事と吳々畏存候
 一昨日後三條殿ニも未拜面不申入尙御序ニ宜希上候今日ハ當番尙明日御
 兩家共參上萬々拜上ニ可申上候也

四月十八日

以上

富 妍

子 固 大 君

昨答内啓

(原朱書)
右岩倉具視直筆

二一 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年
四月十八日

拜承候御揃御安全恐悅存候

一昨日請御上御苦勞畏入存候

一一昨日世上動靜一向不承候

一長人兩人昨日迄ニ承候爲指事も無之ツマリハ長井申居候邊ニ候明日拜
面可申上候

一昨夕泉方御同様到來候其内純子右之所小子ハ重箱ニ候文匣中如御示候
右到來之品故辭避とも難相成故受納仕置候處如仰先今日以使挨拶可申
遣候答禮は御相談爲申伺候

一明日分配學院雜掌ハ何卒拜領希上度存候過日配當書一覽ハ候得共實ハ
そこ所ても無之不及熟覽且右分配方愚按ニハ甚不甘故相談候ハ、存慮
可申存念候得共無其儀故貧着不及旁實ハ一通りも不及一見候故學院之
處心付無之候是ハ何レ可願候間宜希上候
右等自是今朝ハ申上度存候處又長人來談及延剋候處御人遣恐入候先御受
如之候也

十八

封

叟

二二 河州浪人探索泉州より陽明家へ差出書面長

州上京阿州微行其外岩倉具視書翰

文久二年四月廿日

口述

昨日者參上御面働恐入存候其砌上置候覺書一紙并阿州浪人探索一紙等不

若候ハ、申度候

過日泉州陽明家ニ差出候自分限り覺書と申候二通何卒鳥渡拜借願度存
候早々可令返上候

同日於陽明家泉州書付之浪士鎮靜御請書一紙是又不苦候ハ、拜借願上候
長州上京如何哉成卿御咄しも無之候哉

阿州微行ニ一昨朝上京之旨承候實否分り次第申上候

黒田出府兵庫迄出張之上所勞ニ引返し候由に候越前々中將姓如何之人
元來國論御聞之事も不被爲在候哉伺度存候實事承合度存候事ニ候

到來物御返禮如何思召ニ候哉御治定候ハ、伺度存候泉州滞在ニ付何歎從
陽明内々賜物之事如何相成候哉定而御心配ニ亦も御六ヶ敷哉とも御案し
申上候御序に伺度候

今日堀招寺院借用浪人押方此二ヶ條可申通心得ニ候御用も被爲在候ハ、可申通存
候

右言上願旁如此候也

四月廿日

富 妍

言上

二三 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年四月廿二日

拜承候過時寛拜畏入候爾來御安全恐悅存候然者御細示何も敬承候於小
子も昨日來懸念之事にて妍朝臣可遂面談候自餘御示之趣共承存候
一革匣中百之事於小子ハ家僕共へも一切不申聞候別段隱蔽之心得ニも無
之候へ共取計方も未定且ばつとも可相成旁一人も不申聞候事ニ候貴家
如何御取計哉どふか御家來存知哉ニも承候何分小子ハ先不申聞候是も
御心得之處猶又可伺候任便申上候也

四 廿一日

叟

固 大 君

極内々

二四 庭田重胤より中山忠能宛書翰

文久二年四月廿一日

攘夷期限之事來五月十日無相違拒絕決定之旨大樹言上有之候事

御安全恐悅存候抑水戸好雲齋東行御斷申上候由にて彌今日一卿御暇參
内ニ相成候大樹ハ今朝下坂候只今前書之通大樹言上之旨被 仰出候仍右
早々申入候也

四月廿一日

重 胤

中 山 殿

二五 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年四月廿二日

今朝御細書之趣具ニ令拜承候御安全奉賀候扱昨日妍朝臣面談仕候不及懸念哉之旨被示候猶拜談可申上候草匣之儀拜承候少々不審ニ存儀も有之候拜談可申上候扱贈物事承候

表向 朱書 楮折 二重 一重肴一重菓子

晒布 貳疋 伊丹 一樽

別段内々

文匣中

入念

懷中物 紙入 烟草入等對 一組

扇子 彫骨 拾本

或ハ

小屏風又ハ 衝立

右何様可然御同意仕候辨當組肴ハ前文之方可然哉と存候右之邊ニ亦早々取調猶又可伺申候凡同等之ニ位不相成候ハ如何ニ存候間何も可伺申候表向之方朱書之分ニ亦ハ如何是伺候一寸御答教奉願上候也

四 廿二

叟 百拜

固 大公

内々

二六 伏見寺田屋一條聞取書寫

文久二年四月廿三日

覺

只今寺田屋内間^{本ノマ}之虎吉と申もの引寄次第柄探索仕候處左之通一今暮六ッ前時頃借切船三艘寺田屋之濱に着いたし候處無程猶又一艘着

船いたし右四艘ニ凡人數四拾人計則辨當數四拾相誂ひ尤右之もの者不殘薩藩ニ有之候趣ニ不殘支度いたし右辨當ハ尤皮包ニ拵懸中白木綿三反買取度旨申し候付横町和泉屋と申木綿屋に申參候處無程持參り候處直段不相分右薩藩之もの買調候折柄當地薩州屋敷には相見へ小使様之もの案内いたし同藩之もの拾四五人計羽織袴等も無之うでをまくり中ニハ立付を履候ものも有之右之者寺田屋に罷越候内壹人之もの先着いたし薩州之罷在候二階に揚り候處二階を兩三人下り右拾四五人之内六七人計内に這入表之間に上り右六七人之もの着座いたし候處最前二階を下候兩三人之ものと挨拶いたし何角窃ニ咄し合居候譯ハ言語相分兼候由處右咄し合之内ニ尙亦二階を兩三人計も下り居候然ル内ニ表之間に双方共刀を抜烈切結候付家内大混亂ニ前虎吉義は其儘裏に逃出家内不殘逃去然ル處右虎吉申居候ハ先相倒居候ものは奥并表之間且庭等ニ凡七人計も相倒居候趣

一薩州屋敷を相越候もの之内一人之者寺田屋之紋付有之丸提灯を燈し右屋敷に引取候哉と見請候趣然ル處二階之ものハ拔身之鍵或は刀を拔居下ニ罷在候もの共儀も刀拔候儘先互ニ見合居候様子ニ相見へ申候
一只今探索仕候處寺田屋方二階并下タ共表戸を寄セ有之戸之透間を覗見候處庭に倒れ居候ものハ其儘ニ候哉奥表之間ニ倒れ居候ものと相見
は所々ニ倒れ居候儘小床机様之ものニ腰懸ケ居候ものも有之或ハうろくいたし居候ものも有之人數凡五六人計罷在候二階之儀ハ人數之程難相分拔身之刀ハ最早相納メ有之候
一右之通不取敢申上候

四月廿三日

二七 寺田屋一條書面

三通 文久二年四月廿三日

覺

只今駕籠壹挺寺田屋方の差入死骸を乗せ昇出し猶亦四五挺も差出し候趣ニ相聞候ニ付傳馬所ニ承合候處右之駕籠ハ不差出候由申之右者小野屋甚吉と申日雇請負人方差入候由

一夜五ツ半時分薩藩之もの淀表ハ早飛脚之趣ニ駕籠貳挺仕立右飛脚兩人儀は右駕籠に乘當地薩州屋敷に罷越候處ニ駕人足ハ先剋引取申候然ル處右駕籠は四挺拵候様最初罷越候もの申之候ニ付駕籠拵相待居候様只今馬ニ陣笠を着傳馬所に罷越直様駕籠ニ乘是も薩州屋敷迄歟と被存候尤早飛脚之儀は京都迄之賃錢相拂候ニ付同所迄可罷越積り有之候哉之處全寺田屋之様子承り候儀と相見に薩州屋敷ニ駕籠を下り右屋敷に這入申候
右之通不取敢申上候以上

四月廿三日

覺

寺田屋方ニ手負七人之内五人者相果貳人者疵請居未存命右之者不殘駕籠ニ壹人ツ、宰領付添當地薩州屋敷に引取候由
一大坂薩州屋敷ハ貳人早駕籠ニ京都屋敷に罷登候よし
一同藩三人程騎馬外ニ八人早駕籠ニ大坂表ハ當地ニ繼立上京之よし
一寺田屋方ニ薩藩四人計相残り跡片付始未付居候よし
右之趣相聞猶追々取調表向肥後守ハ被申上候積りニ御座候事

四月廿三日

（原朱書）
右筆者不詳

薩州 村山齋助

是技柳右衛門 美玉三平 大久保少助（市藏） 善積 大谷

山本清藏 河内介 田中市之助 左馬助 松井大次郎 千葉幾太郎

大坂土佐堀二丁目 薩州屋敷廿八番長屋

大坂堂島濱二丁目加賀屋清兵衛

右中山自筆ノ覺書トミユ

二八 若州内使藤田の件 中村又兵衛の件 和宮御使

見合の件 寺田屋の件等

文久二年四月廿四日

一 別紙二通到來候間入御覽候御覽後可返給候

一 若州内使藤田來り鎮靜方周旋之禮申來候貴亭にも出頭之處未參上候間

此度ハ小子ノ宜申上頼申候小子方へも初來候事ニ候此段申上候

一 中村又兵衛御暇之事も若御暇ニ成候ハ、和州上京之事傳言申遣度由ニ

申居候

一 和宮へ御使御見合之事も被 仰出候様願度申居候間未其邊ニ不相運甘

一 二日比橋卿へ御返事被爲見下候位之事と先申置候

右藤田頼居候ケ條ニ候間申上候宜御勘考希入候

双方歟不分明

一 昨夜伏見舟宿寺田やと申内ニて浪人共と薩藩と鬪戰四人即死十四人手

負之由臥龍ハ駕ニて薩京邸へ召連候由等藤田申居候未委細ハ不分明由ニ

候也

四 廿四

右嵯峨手跡

二九 近衛忠房より正親町三條實愛宛書翰

文久二年四月廿四日

彌御安し楮昨日者御書置被下候扱ハ昨夜從泉州留守居來浪人共之義精々

加鎮靜候處不相用今曉三十人計浪花ヲ立退キ淀川渡り伏見へ着其後分散

仕更ニ行方不相知實以心配之至仍御届申上置候趣且又若州へも届置候由

ニ候^{不分明}□卿忠房書中實ニ當節大事之場合其元厚 叡慮も被爲在滯留被 仰

付置候儀旁浪人共不慮之騷亂引出候者泉州ニも折角忠誠も難行届哉ニ

可相成ト痛心候何卒如才無之哉乍尙更鎮靜專ニ勘考在度もの吳々も勘考可致様吳々も申遣し置候事ニ候仍御心得迄貴卿迄申入置候事

四月廿四日

右之次第ニ而、ノ若州大ニ心配と被察候事ニ候也

忠房

極内密

三條大納言殿

答

三〇 岩倉具視近衛忠房等書翰

文久二年四月廿四日

拜承候昨夜後之所存も不承候得共只今三條を被示候陽明家薩留守居届出候ニハ昨夜兩三人討留先靜謐との事ニ候外ニ騒ケ敷事も不承候此節之勢ニ而ハ御所向ニ而も何とか御覺悟無之候而ハ難相成哉と存上

候

泉州已下是非早々被下度存候昨夜之次第被聞食御芳詞旁と申邊ニ而今日早々被行候ハ、如何と存上候例之越樽免可給候

昨日入尊覽候御方之邊書類ニ付實ニ御案し申上候無御助才御事ニ候得共恐らくハ御飛出し之様ニ事す、め候者出來哉と御案し申上候失禮々々高免願候

右御受迄如此候也

四 廿四

富 妍受

副書

唯今薩州留守居來浪人頭立候者兩三杯昨夜打留候趣右ハ國の者ニ而甚如

何之者共早速打留置候旨ニ候仍書添申上置候事

四月廿四日

忠房

三條大納言殿

机下

別紙只今宅方持參候間早々入尊覽ニ候事ニ候神速ニ無之候而ハ不相成哉
可相成者御參御勘辨如何可被爲在哉早々言上如此候也

四廿四

今日者内府公出仕ニ而御前へも被召候様子此間方之次第何も申入候此
公ニハ肥後藩之事被申居候事ニ御座候也

具視

上包
中山殿

三條殿

早々内啓

三一 浪士鎮靜薩藩へ被仰付書寫

文久二年四月廿五日

四月廿五日浪士鎮靜之義薩藩へ再應被仰付寫 二

浮浪之徒蠻夷之儀より彼是蜂起之趣去十六日内々言上被惱

宸襟候處鎮靜之儀御受有之被安

叡慮候處又々一昨夜以來猛暴之形勢被

聞食候元來右之徒爲 皇國赤心報國之志ヲ以テ投身命候段者 御感之御

事ニ候得共攘夷一件ニ付而ハ實ニ自先年深被惱

宸衷候處何分國中一致之儀第一と被 思召候ニ付尙厚被廻

叡慮候御事ニ候然處方今血氣之壯士等不用理解暴論ヲ爲主奉 勅命を待

すして猥ニ亂妨ケ間敷儀ニ及候段ハ忠憤却る違 勅之筋ニ相當不埒之至

二候右等違背之輩ハ早殿に可加制止儀ニ被 思召候事

三二 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年四月廿七日

先時御投書之處大垣留守居來面談明日戸田采女正中無據不奉即復恐入存候彌御揃御安全恐悦存候然ハ拒絕期限御一定ニ付御別紙之趣御申立之由御尤ニ承候篤と拜見再三ニ及候へ共先心付候廉無之此分ニ御宜と奉存候心付候儀若出來候ハ、今晚迄ニ可申上候

一賢孫御儀別紙二通内々拜見仕候先御蹤跡聊相分り候へ共何分御心痛奉察上候いかにも切迫御誠忠所感泣候衆人難及義ニ候御向卿分も御止メモ申候通り先とかく御猶豫可然と奉存候

一黒氣事未承候何様天變も可有之候

一昨日御遣水投書之事恐入候事ニ候是又未承候何等の建言歟ハ不存知候へ共恐入候事ニ候

一公知朝臣下坂備前之事も初承候一向不承及候併長土路次警固ヲ付候由承候虚實如何

一大樹下坂後何も不承候乍去惣登城有之候哉ニハ承候夫ニ付不容易沙汰も被申渡候哉之風聞承候右不容易と計ニ譯ハ不承申候

一柳橋替り六の事は昨日一寸承候

一一橋ノ事も一向不承候

一當月十四日夜ハ相發し十六日迄ニ於東武浪士狩有之由諸大名ハ申付右爲召捕候由千五百人捕候旨五十人計ハ割腹候由只今承候併十四日朝彼地出立上京ノ人一昨日面會候へ共右はなし無之候恐クハ虚妄と存候尤兩國橋邊梟首等有之諸候へ申付廻りハ有之候由十四日立之人申居候夫ヲ増補と存候

一陽家へ申立ノ事御同意存候御申立候ハ、可申立候乍去迎も埒明キ不申と存候過日無據用事有之進藤式部面談候間聊議論申試候處同人ハ随分

吞込候へ共ツマリ役ニタ、ヌ事と被察候篤と御再案可給候とふも無益哉と存候先ハ右等御答旁如此候乍例大亂書可被免給候也

四 廿七

追申御三通返上候

内々御返事

野 叟

三三 岩倉具視より中山忠能宛書翰

文久二年四月廿八日

拜承御安全恐悦存候然者過日ケ條書返上之旨承候實ハ未不寫取其儘返上候恐入候得共今一應拜借希上候

一昨來も段々御心配之旨御尤ニ拜承候昨日參朝一昨日北條面會宍戸面會各成卿へ申入置候其砌尊卿御心配之旨も拜承愚意も申上候事ニて二三云々此事先長州第一と存候事ニ候外所存之旨又々可申上候
今日堀に面會可申試候得とも多分ハ六ヶ敷哉土州位之事と存候

今夕北條成卿へ罷出萬々申出候亦在滯御受出候筈ニ候長州召留ハ偏ニ公武之御間周旋大道ヲ明來り候邊深く御賞美和州上京御沙汰之旨御受有之様心配頼思召候と申事專務之心得次ニ諸浪士取鎮と申心得ニ御座候右ニ宍戸北條等へ申入置候深難有存候成卿ハ昨日申入置候若ニも退役哉ニ可相成旨風聞承候右ニ付實ニ殿印様事深ク御案し申上候事共有之候片時も早々御相談御取計祈念ノ事ニ候萬事ハ明白拜上ニ亦萬々可申上候仍早々如此候也

四 廿八

明日若御參候ハ、拜面於宮中三條杯御同座申上度存候此邊ニテ篤と々々御相談申上度存候實ニ一大事ニ御座候御刻限も候ハ、伺度存候將此一紙明日御持參にも相成候ハ、畏存候也

上封紙

實ニ御大事明日當り御評定ハ如何之物ニ候哉伺度存候

子 固 君

富 妍

内啓

（原朱書）
右岩倉具視自筆

三四 廣橋光成より中山忠能宛書翰

文久二年四月卅日

彌御安全珍重候仰入道准后殿始辭職落飾等被 仰出當時慎中之方々御宥
免之儀ニ付所司代書取到來可披露候尤早々執計候様との事ニ候乍御苦勞
唯今御參集可給候様存候仍是如此候也

四月三十日

追て正親町三條殿御始御傳希入候也

光 成

中 山 殿

三五 若州家來藤田權兵衛御所向相伺被仰付之件

文久二年四月晦日

私儀別段之譯ヲ以 御所向内外御用筋御沙汰次第相伺候様可仕旨被 仰
付冥加至極難有仕合奉存候此段爲御届參上仕候

四月晦日

酒井若狹守家來

藤田權兵衛

三六 中山忠光行衛不明報告書

文二年四月

先月廿七日申上置候忠光様御事同月廿六日萩城下ニ被成御越着候ニ付御
旅館御仕構仕暫時御滞留相願置候處忠誠無二之御心事餘程御切迫と被相
窺種々御議論も有之候内廿九日夜何所ニ御行向候哉御蹤跡不相知候付家
來之者差出所々探索仕らせ候間此餘御座所相知候ハ、御様子委曲可申上

候此段御聞置可被下候

四月

三七 山内豊範出府の節京都道行に付依頼書草稿

文久二年

一蠻夷渡來以後 皇國人心不和ヲ生し候處既去夏已來 帝都ニも彼是不
穩之儀共有之島津家取鎮後先靜謐候得共萬一京御騷擾之事有之候而ハ
追テ國亂之程難計彼夷族之胸算ニ可陷ト深被惱 宸襟候於土州ハ大坂
御警衛も被申付有之候義幸京師御通行之旨被 聞召候間非常臨時之別
儀ヲ以テ暫滯京有之内實ハ御警衛之段御依頼被爲在候事

但出府掛且俄ニ 御沙汰ニ候間滞在之儀何ニも御受難澁之事ニ候ハ
不及是非候間家門之内早々上京爲土佐守名代在京厚御警衛御依頼
候事

一先件不容易世上之形勢ニ付

已下細黒同文

○皇國之御爲ハ、、、、、、、、、

別紙

(原朱書) 土州家門之内山内民部殊更ニ被 聞食候事
右ハ中山自筆ノ草稿

三八 勅使被立に付薩藩へ被下一紙寫

四枚 文久二年

勅使被立候に付薩藩へ被下一紙寫 三

今度關東に 勅使被差向候儀は方今之時勢深被惱

叡慮偏 公武御一和國內一致攘夷之成功可有之以深重之

思召別紙之通被決三事速其一群議之所歸可有奉行由被 仰出候天下之重

事ニ候間

叡旨徹底候様周旋之儀内々松平大膳太夫に被 仰合候於嶋津和泉も出府

大膳太夫申合先件 御趣意相心得爲 公武宜有配慮頼

思召候事

勅使被立候ニ付薩州被下候別紙寫 四

第一

大樹早ク諸大名ヲ率ヒ上洛アツテ 朝廷ニオイテ相共ニ國家ノ治平ヲ
計議シ萬人ノ疑ヲ散セシメ 皇國一和ノ正氣トナシ速ニ蠻夷ノ患難ヲ
攘ヒ上ハ 祖宗ノ 神慮ヲ慰メ下義臣ノ歸嚮ニ從ヒ萬民ヲ化育シ天下
ヲ泰山ノ安ニ比ヒラレ度事

第二

豊臣ノ故事ニヨリ沿海五ヶ國ノ大藩ヲ以テ五大老トシ國政ヲ咨決シ夷
戎ヲ防禦スル所置ヲ爲メハ環海ノ武備堅固確然トシテ必夷戎ヲ掃除ス
ルノ功アラント 思召候事

第三

一橋刑部卿ヲ後見トシ越前々中將ヲ大老トシテ幕府ヲ扶ケ政事ヲ計ラ
シメハ戎虜ノ慢ヲ受スシテ衆人ノ望ニ協フヘクト 思召候事

勅使被差立候ニ付薩州被再度被下候二紙 五

一橋刑部卿越前々中將等之儀御ケ條書之通被仰出候處去十五日大樹年比
ニ付田安大納言後見願之通差許越前々中將國政可關係被申付候由言上有
之就而者後見之義強而は被 仰出兼候得共何分内外不容易形勢ニ候間深
被遊 御案痛以一橋被登用候方可然 思召候但名目之處可爲輔弼歟且越
前大老職之事爲家門之間流例之通ニテハ可差支候得共先件非常之所置ヲ
以テ可被申付 思食候但是以差支候ハ、政事總裁職ト稱候而も可然 思
食候

但越前々中將儀 思食之通相成候上ハ方今内外危迫之時節ニ付今年秋
中上京有之國是之議論被

聞食度候且同人彌上京之節者引續三郎ニモ可有上京之候其邊相含可有
周旋様ニト 思召候事

右一紙

方今之時勢不堪傍觀鳴津家一同舉三國拋身命勤

王攘夷之旨趣言上不斜 御満足 思召候今般關東に 勅使被差向偏ニ君

臣御合體國內一致攘夷之成功可有之以深重之 思召被 仰下候ニ付 勅

使ニ引續三郎出府可周旋去る十二日以書取被 仰付候處越前々中將國政

關係之義於關東取計候段

叡慮之旨徹底候様盡力可有之深御依頼 思召候

右之段内々 御沙汰候事

三九 三公還俗の件和宮御懇願の件和宮御縁組後

違約の件等に付草稿 文久二年

一去十四日御内慮被 仰出候三公還俗并關白内覽辭退復職内覽之儀當月

中被 仰出度候事

一和宮御方御懇願之通明亥年秋必定御上京可被在事

但萬端精々御省略御手輕ニ御上京可被爲在候事

一和宮御方御縁組ニ付御下行已前御約定之廉々御着府後彼是御違約之儀

共有之候ニ付行違之廉ハ御兼約之通被改候様得と可被仰含 思召之事

右等大和守上京候ハ、得と

叡慮之程被 仰出候思召ニ被爲在候宜在申達候事

(原朱書)
右中山忠能自筆

四〇 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰 文久二年五月四日

御書取被渡方之事相談仕置候處只今返答有之ヤハリ浦靱負へ御渡し相願
度由少々意味も有之巨細ニ承候明日可申上候何分御渡しハ御都合次第早
々之方と存候大膳ニも當月中ニ者東武出立哉之旨ニ承候是又明日可申上

候也

五四

（原朱書）
裏書

御用被爲在候間久世大和守早々上京候
様去月十六日被仰下候處未否之御受

（原朱書）

此裏書ハ中山執筆ナリ

叟

固 公

内々

四一 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年五月六日

別紙四通只今到來候間差上候いかゝ相成候に哉と存候何分御勘辨希上候
薩へ先時相渡候處感悅難有狩退散候今更扱々六ヶ敷と存候とくと御勘考
希上候薩へ右之事申入候邊もいかゝ取計可然哉是又御勘辨御處置願上候

五六 二更

叟

固 大 公

内々

四二 千種有文より中山忠能宛書翰

文久二年五月六日

過刻仰之趣則唯今三浦七兵衛へ巨細申聞且御書付相渡候處先以還俗二通之
儀若狹守申上候邊程能被 聞食難有奉存候且又 勅使之御書付御書改ニ
相成右邊ニ候ハ、頓ト御差支無之誠以安心難有カリ段々御兩卿様御
丹誠之段厚畏入猶早々主人に可申入趣申居候猶昨夜從富妍朝臣被相渡候
書付明朝迄返上可仕旨申歸候仍早々右申上度如此候也

五月六日

有 文

中山大納言殿

四三 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年五月六日

拜見候御安全恐悦存候然ハ昨夜藤田次第先刻薩兩士入來岩倉今朝往來之事共拜面可申上候岩狀二通先入御覽置候後刻御隨身可給候扱々大苦心大弱リナカラ奮發早々參 内拜談願度候併只今漸朝飯濟候所ニ候早々拵參内候へ共已刻過ニ可及と存候也

五六

叟

四四 廣橋光成より中山忠能宛書翰

文久二年五月七日

彌御安全珍重候抑昨日御沙汰被爲有候關東へ 勅使之事殿下申入早速所司代ハ相達則返書子刻計到來候右使ノ者凡所司代へ參候と存候頃所司代より久世大和守上京御請申越候深更ゆへ今朝同役内覽被披露候やう申置候也

候光成御世話御用輪門へ參上ニ付參勤遅參ゆへ此段申入候大亂書可被免候也

五月七日

光成

上封書

中山殿

四五 岩倉具視より正親町三條實愛宛書翰

文久二年五月七日

拜承昨夜兩士度々催促之所無人之事ニ而斷不參今朝千朝臣へ申入御請申來候也

五七

昨夜も丑刻過

不相分 上之御決答早ク心得度候也

具 視

三 條 殿

内々啓

四六 岩倉具視より中山忠能宛書翰

文久二年五月七日

拜承精々早々來候様と家來遣候所承知ニ沙汰無之更ニ家來催促申遣候事ニ候分り次第速ニ可申上候
右認候所堀來り申候ニハ和州御返事來り候ニ付若哉御延引哉と色々評定ニ中公ハ者小松正公へ者中山小子へ者堀別段願出候次第右者和州上京ニ亦も必決ヲ大樹ニ問候事是非此儘中甸 勅使と申願居候此上ハ早々千種と兩人若家來召寄御策ノ通可取計存候事ニ候右ニ付又々隙取候事今日ハ御退出ニ明明白之御事ニ被遊候ハ、如何と存候早々如此候也

五 七

具 視

中 山 殿

早用

(原朱書)
右岩倉執筆

四七 御使人體の件に付中山忠能書翰

文久二年五月八日

追何分事危急之場ニ相迫實ニ心配仕候略書御免希上候也
過日者御投書畏令拜承候先日ハ寛々拜顔色々申伺恐畏入存候彌御安全令渡給奉恐賀候仰御示命之條々且具朝臣へ御傳言等何も敬承仕候今日何レ共御使人體不被仰出候ハ暴發ニ決候由薩士中山忠左衛門今朝正三へ訴出候旨ニ候定不穩之至候へとも偏固之國風如何とも可仕様無之候扱此書狀此處迄書付候處子和朝臣參上昨日若へ内談仕候 勅使之儀不及是非候間早々御治定可然旨返答ニ候間今日人體可被 仰出候小子ハ具朝臣可宜候

本人固辭之旨ニ候へとも何卒御説得給候事不相成候哉堅固ハ鶴卿も好ニ候へとも何分今日之模様不案内之人故他事ニて押付ラレ候様之事有之候ては實ニ〱大事之御用何とも案し申候併妍朝臣一人ニてハ固辭と申儀ニ候ハ、鶴卿と兩人成共可被 仰付候哉何卒早々御勘決之上如御約早々御申上希入候用途之義も御約之通御申上右等早々言上仕候也

五月八日

（原朱書）
右中山執筆

四八 一條忠香より中山忠能宛書翰

文久二年五月七日

昨鳥之拜面畏入候彌御安全令恐賀候然ハ今朝ハ御別書令拜見候直ニ富妍へ令返却候和州上京之趣先以幸甚と存候日附ハ五月朔日ニ候へハ路次幾日ニ而京着と申事ハ不相分哉定而若方ニハ相分り可有候哉トも存候一應御尋ニ而ハ如何哉定而普通之日割ニ而ハよもや無之五日程ニハ急々上京

哉とも存候其邊御押引無之テハ不叶と存候扱老中上京候へハ御使ハ御止メ之方と存候間今日鶴卿之處言上ハ先見合セ可申候矢張申上候方宜候ハ、可示給候愚按ニハ老中上京ニ而應對候ても一存之返答無之と存候何レ伺候上とか何とか可申は畢定候左候ハ、何分早々歸洛ハ可決答と被申答候て大和歸洛之後ニツ、キテ鶴卿ニ嶋印付添東武へ被使先方ニ而返事被聞候テハ何如哉或ハ御使ハ矢張 和宮へ御書ニ而も被遣候儀ニコシラへ東武へも一使被差立残りし老中へ談合爲致大和歸洛ヲ被相待候ハ、殿中之論と大和言上ト相違も難計哉とも存候併右ハ即案故可否ハ難辨候或ハ上京之上富妍ト鶴ト兩人カワル〱に被内談候上ニ而表向 朝廷へ被召候テ被申聞候ハ、如何哉右三ヶ條之邊御勘合ニも哉トムサト乍越樽申入候扱又昨日伺候雲州彦等上京之よし是は昨夜來相考候處 玉を奉執之浪士計策をサクリ知候テ非常ニ備へ申候譯哉ニも或ハ彼ニ先立テ東武之面々を早く 玉を彦城に幽閉致候謀略は明白哉とも存候間左相成ては甚

六かしく存候間薩長ニモ其邊ハ定り心得候義なから御膝元近邊ニ兩國ノ
人數潜伏爲致置候ハネハ卒然急ニ相成候時ハ頓ト無爲方次第ニ可相成哉
と被存候間あらかしめ其用意ハ於此方も致置ネハ不相成哉ト存候間御助
才無之候へとも深く其邊御勘考置可給候正三へも御話被遊可給候餘り深
入過候説と可被思召候へとも實に安危之境ハ老中上京之時ニ可有之と被
察候間内々任心配申入置候 御前之砌ニ小子之説 御心得迄ニ御申上置
可給候 玉御主意彦城へ被爲成候 思召なれハ無力候へ共幸薩長之誠忠
も有之處故此御場所然と御決定ならてハあふなき物ト被存候色々相考昨
夜ハ不眠今日ハ別々大疲勞亂書可被免候甚恐入候得共若し御用ニ被
召候とも兩三日之處保養願度存候御合可給候一昨日昨日とツ、キ昨夜も
心配候故歟今日ハ大ニ困り居候不苦ハ兩三日之處出頭は御斷申入候御用
も候ハ、何成共伺ヒハ可仕候夫共火急之御大事出來候ハ、尤所勞ヲ扶ケ
可令出頭候へとも御書通ニ相濟候御用は御一書歟或は西澁富妍之内ニ

可示給候様願入候早々如此御扱々井蛙之説實ニ可否難辨候間愚存之通
申入候御勘合ニも哉ト存候也

五月七日

休 休 休

桃

固 君

極内々秘事御覽後ハ火中

四九 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年五月八日

追申忠左衛門只今來談もはや暴發ニ決し候様子故是非共今日御使不被
仰出候てハ六ヶ敷候宜希入候也

具ニ尋候處此返事來候入御覽候今日參 内前難去人來面談候間少々可及
遅參御合願入候恐入候へ共御參之上ハ萬端御運ヒ御如才無之候へ共宜願

入候也

五八

封

固 公

極内々

右上封紙

五〇 岩倉具視より中山忠能宛書翰

文久二年五月八日

一堀口氣六ヶ敷次第ニ付昨夕申上候後兩士招候處繁多不來今朝和朝臣參り三浦速ニ御受則和朝臣參 朝被申上候筈ニ候早々如此候也

五八

具 視

中山大納言殿

（原朱書）
岩倉直筆

五一 武家傳奏より所司代へ被達書面草稿

文久二年五月八日

（五月八日以武傳所司代へ被 仰出）

頃日差掛り^{不容易}深被惱 叡慮不容易御用被爲在候ニ付當月中旬發足ニ而關東

に 勅使被差下候此段早々可申達被 仰出候事

但尋常之儀ニ候者關東御往復之後被 仰出候へ共非常火急之儀ニ付先

文之通被 仰出候事

五二 武家傳奏廣橋光成坊城俊克より所司代酒井

忠義宛達書

文久二年五月九日

（和州上京被止候ニ付 武傳若州に往反書狀寫 初度）^{（原朱書）此括弧中ノ文岩倉具視自筆}
彌御安全珍重存候然者大和守上京之儀過日被 仰出候得共 勅使被差向

候ニ付る者同御事柄之御用且關東ニも御繁務之折柄ゆへ大和守被止候方ニ可被遊哉御談可申入内々 御沙汰候事

五月九日

俊 克

光 成

酒井若狹守殿

五三 所司代酒井忠義より武家傳奏廣橋光成坊城

俊克宛上申書

文久二年五月九日

御翰致拜見候彌御安榮珍重奉存候然者久世大和守上京之儀過日被 仰出候得共 勅使被差向候ニ付る者同御事柄之御用且關東ニも御繁務之折柄ゆへ大和守上京之儀被止候方に可被遊哉御談可被 仰下様内々 御沙汰被爲有候旨被 仰下候趣委細奉敬承候右は誠以御尤至極ニ奉存候得共大

和守儀者矢張上京仕 御用之次第柄篤と相伺直様歸府仕候方萬端御都合ニ相成可申於關東當地御模様柄も委敷相分御双方之御都合可御宜と存候間大和守上京之儀者不被止方御宜御座可有哉ニ奉存候右御報迄如此御座候以上

五月九日

忠 義

廣橋 一位 殿

坊城大納言殿

尙以 勅使御差立之儀者大和守上京頃合ニ無御構當月中旬御都合次第御差立之方可御宜哉ニ奉存候事

五四 岩倉具視より中山忠能宛書翰

文久二年五月十日

昨日出來候得とも寫とり内公に一枚送り申候と存候而彼是延引恐入奉存

候十分ニ短文ニ被致候誠ニ火急輕卒宜敷御斷申上候との事ニ御座候
今朝兩士之申來り候由ニ候和州之事承り候而言上候
今日午刻比御參之旨猶午後參 朝萬々可申伺と存候
右早々言上如此候也

五十

富 妍

子 固 公

（原朱書）
右岩倉具視自筆

五五 近衛家より島津家への書翰

文久二年五月十二日

五十二陽明島津へ
今度關東の勅使被差向候儀者方今之時勢深被惱 叡慮偏 公武御一和
國內一致攘夷之成功可有之以深重之 思召別紙之通決三事速其一群議之

所歸可有奉行被 仰遣候天下之重事に候間 叡旨徹底候様周旋之儀内々
松平大膳太夫の被 仰合候於島津和泉も出府大膳太夫申合先件 御趣意
相心得爲公武宜有配慮頼 思召候事

五六 内密御達書

文久二年五月十二日

別紙之通被爲在 御沙汰候事

忠 實 雅 通 定
能 愛 典 熙 功

内密

是ハ有申旨御止ニナル

浪士鎮靜之儀嶋津和泉に被 仰付置候處同人出府被 仰付候ニ付浮浪取
押方之儀難行届深 御不安心被惱 宸衷候萬一京師及動搖候は諸國可
蜂起哉ト深被惱 叡念候就る者修理太夫被 召登度候得共差支も有之候
ハ、嶋津石見率人數上京ニハ有之候へ共猶又今一人嶋津圖書將士卒神速
入洛有之被安 叡慮候様被遊度 思召候事
右一紙等二通文久二五十二陽明と和泉へ被傳雅典卿持參

五七 勅使下向三事被決に付中山忠能達

文久二年五月十三日

今度關東に 勅使被差向候儀者方今之時勢深被惱 叡慮偏 公武御一和
國內一致攘夷之成功可有之以深重之 思召別紙之通被決三事候ニ付速其
一隨群議之所歸可有奉行被 仰遣候天下重事ニ候間 叡慮徹底候様於幕
府周旋有之度尤於大膳太夫は兼る丹誠之儀故爲 公武彌可有盡力深頼

思召候事

但於嶋津和泉儀爲公武周旋同様存意之旨内々言上之趣茂有之候ニ付今
度出府大膳太夫申合丹誠候様御沙汰候間此旨心得可有之被 仰出候事
右十三日松浦鞞負ヲ招忠能渡ス
但於松平大膳太夫も兼る丹誠之儀ニ付猶又申合宜在周旋

五八 關白外三名へ達書寫

文久二年五月十四日

入用御治定 二ノ内

文久二五十三四傳奏へ被出所司代へ御内慮可相達由被 仰下

關 白

依所勞辭退當職内覽等ニ付可被 聞食
思召候

入道前左大臣

還俗之上關白内覽等可被 宣下 思食候
同上

入道 准后

右萬端如平常可心得去三十日被 仰出候ニ付る者當月下旬還俗可被 仰
付 思食候得共老年之儀故可任所存可被 仰出 御沙汰候

入道前左大臣

入道前右大臣

右萬端如平常可心得去三十日被 仰出候に付るは同頃還俗可被 仰付

思食候

右中山忠能自筆

五九 同上所司代への達書

文久二年五月十四日

五十四以篤丸伺定以子和若州へ送ル

關白殿疝痛咳嗽疾熱且被及老年急速快氣難量ニ付被辭申當職内覽候處近頃世上形勢不穩之時節重職之人被引籠勝ニ而ハ差掛候御用彼是御差支之儀も被爲在候ニ付可被 聞食思召候後職之處種々被廻 叡慮候處入道前左府ハ元來無難之人體故此場合ニ而ハ右人被 仰付候ハ、世上穩ニも可有之と被 思召候且入道前右府ニハ三公同様還俗被 仰付候へとも於關白職ハ先達已來武邊言上之次第も有之候間已後とても不被 仰付 思召候尤右之儀ハ還俗被 仰出候同時屹と本人に被 仰付候 思召ニ候事
右中山忠能自筆

六〇 勅使下向に付達書

文久二年五月十八日

五十八以陽明重賜

御箇條書之通被 仰出候處去十五日大樹

但越前々中將儀 思召之通

本文計
十九日長門
へも遣ス

但越前々中將儀 思召之通相成候上は方今内外危迫之時節ニ付今年秋
中上京有之國是之議論被 聞食度候其邊相合可有周旋様ニと 思召事

六一 久世大和守江戸發足日限

文久二年五月十八日

久世大和守明九日^{十脱カ}江戸表發足道中滯無之候へハ來月四日京着可致旨申來
候間此段爲御心得申進候事

五月十八日

六二 老中より所司代酒井忠義宛書翰

二通 文久二年五月十八日

所司代^ハ和州上京御理替りとして板倉上京伺二通ノ内<sup>是ハ岩倉自筆ニテ書
面ノ端ニ記入セル者</sup>
大和守儀明十九日當地發足來月四日其御地着之筈治定致し先便申進置候
處此程中より風邪罷在押^ハ登城相勤居候處追々相募一昨十六日より引籠
養生致し候得共昨今熱氣強相成何分明日發足致し兼候ニ付無據明日は發

足延引致し候依^ハは同列共之内餘人を上京被 仰付候^ハも苦ケ間敷候哉
此段傳奏衆^ハ御聞繕否早々御申越有之候様致度奉存候依之申進候以上

五月十八日

板倉周防守

水野和泉守

松平豊前守

酒井若狹守様

猶以差急候儀ニ付兩街道^ハ同様之書狀差出申候以上

所司代^ハ和州上京御理替りとし^ハ板倉上京伺二通之内<sup>是ハ岩倉自筆ニテ書
面ノ端ニ記入セル者</sup>
同列共之内上京之儀ニ付別紙之通申進候ニ付周防守儀上京可被 仰付御
模様ニ候然處同人儀來ル八月十五日迄養方妹之服ニ有之服中ニ^ハも御差
支は有之間敷と存候得共爲念御聞合否御申越可被下候此段申進候以上

五月十八日

板倉周防守
水野和泉守
松平豊前守

酒井若狹守様

六三 御ケ條に付別段思召書

文久二年五月十八日

五月十八日

一橋刑部卿越前々中將等之儀御箇條書之通被 仰出候處去十五日大樹年頃に付田安大納言後見願之通差許越前々中將國政可關係被申付候由言上有之就之者後見之儀強之者被 仰出兼候得共何分内外不容易形勢ニ候間深被遊 御案痛候但名目之處可爲輔弼歟且越前大老職之事爲家門之間流例之邊ニ之者可差支候得共先件非常之所置ヲ以テ可被申附 思召候但是

以差支候ハ、政事務惣裁職ト稱候之も可然 思召候

但越前々中將儀 思召之通相成候上は方今内外危迫之時節ニ付今年秋中上京有之國是之議論被 聞食度候且同人彌上京之節は引續三郎にも可有上京候其邊相合可有周旋様ニト 思召候事

六四 所司代酒井忠義より申越書

文久二年五月十九日

文久二五十九言上

松平肥後守松平春嶽之相達候趣爲御心得過日申進候處春嶽之達書損有之別紙認直年寄共之差越候ニ付差進候事

五月

六五 武家傳奏より所司代へ達書

文久二年五月廿日

戊五月廿日 自武傳所司代之被達即夜三浦七兵衛發足下向之由

世上形勢不容易次第ニ付今度大和守上京之儀被 仰下御請之儀御待合之
處日數相立左右言上無之ニ付尙又異變難計模様ニ相成不得止

勅使被指向候旨被 仰出其砌大和守上京暫御延引追御沙汰之旨可被
仰下御内談之處

勅使ハ其儘被指立大和守ハ矢張被 召寄事情篤と被 仰含候方可然言上
ニ付其分ニ被指置候處今日ニ到リ候者

勅使來廿二日發足大和守來月四日上京ト申儀僅之日合ニ御不都合之儀
殊ニ御用筋ハ一事ニ兩端ニいたり東西行違之筋出來候も難計且ハ老中
第一之人體輕易之御取扱ニも當り可申哉ト深

御心配被爲在候其上

勅使下向之處於關東老中第一上京

叡慮伺中之儀に付歸府迄 勅答難致旨被答候節者無益之日數も相掛り候

のミならず内々承知之通り薩長兩家ハ周旋之事被 仰下有之候に付者
對談之始末ニヨリ萬一行違等出來武道之意地ヨリ異變之筋起發候も難計
右様之儀ニも到り候節ハ元來之 叡慮ニ背キ實以難事ト被 思召候此旨
三浦七兵衛ヲ以大和守道中迄早々申遣可相成候者引返シ歸府致シ於關東
勅使相待無異之商量有之候様被遊度 思召候是迄人心騷攘ニ至リ候儀此
姿ニ亦徒ニ時日ヲ送リ候ハ、此上内患之筋相生シ可申哉ト深 御苦心被
爲在候乍去上京ニ付台命之旨モ有之默止シ難キ次第も有之候ハ、尤不得
止儀兼若狹守ハ言上之通上京ニ御宜候得共前件之次第吳々 御案
思被遊候ニ付道中精々被指急上洛有之速ニ御用向被伺靜穩之内片時も早
々歸府御沙汰之趣奉行人心和平之處置可有之頼 思召候事

六六 勅使下向に付夫々へ達書 十通 文久二年五月廿日

（勅使被下

壹四枚ノ内

五月廿日大原へ渡寫惣ケ條書

一勅使の御沙汰之事

一聖策三ヶ條一紙之事

一同上ニ付演說書一紙之事

一田安越前等之儀關東より言上ニ付御模様變に相成御三策中後見大老職之儀輔弼并大老職或政事總裁職タルヘクカ猶又右等之事御受之上者越前上洛 御沙汰一紙之事

一右御三策者其儘被指出初メ 叡慮者如此候得共越前儀御用向爲談ト折々登城之儀被申付候上は三事中御結策可被行歟殊徳川家柱石之家柄且人望之儀猶又第一事第二事等は爲幕府却る彼是難問之筋ニも可至哉言上之向も有之旁以一橋越前等登用之儀主張可申談之事
一今度御使 御趣意吳々被 仰合候通實以 公武御合體ヲ基本トセラ

レ 皇國御持コタへ可有深重 叡慮付御實情ニ之通精々柔言丁寧ヲ盡し可申談偏ニ厚腆ノ 思召徹底幕役ニも眞以拜承之處置專務之事

一薩長兩家の今度

叡慮之旨於關東御受有之候様可致周旋別紙四通ヲ以兩度ニ被 仰下候儀尤紙表之通 公武御合體國內一致攘夷之御趣意ニ候得共周旋對談之始末ニ亦萬一行違等出來武道之意地ヨリ異變之筋起發候様之儀有之候る者實以不被爲在 叡慮候に付右等相心得双方之時宜急度思慮可相計候事

一今度 勅使下向大和守上京等之事一事兩端ニワタリ如何可有之 御心痛被爲在候得共不被爲得止次第者承知之通候右ニ付於關東執政第一上京ニ亦直ニ 叡慮伺上之儀ニ付速に 勅答相成兼候旨強而申立候節者時宜見合深心得可有之儀ト思召候事

一大和守上京之上 勅使に被 仰下候同様一通り被 仰下早々可有歸
 府 御沙汰候但し如何體之往復ニ相成候共兼亦 御沙汰之趣者聊不
 被爲 動候得共若大同小異聊之儀ニ亦茂模様變り有之候節は其旨速
 に以早脚飛脱カ可被 仰下候事
 一於道中和州上京行違之砌取合無之無事通行可致候事
 一於關東被 仰下候儀御受之節ハ尤實儀無之候得共無據筋等申立 叡
 慮之旨御受之容ニ亦も品變に相成候節者或ハ對話之始末ニヨリ決答
 致シ難キ儀共有之候節ハ其旨速ニ家司或重役之者ヲ以言上 思召可
 被伺候事

(初度 薩長に被下二通宛寫) (原朱書) 此括弧中ノ文岩倉具視自筆

(毛利に被下切紙寫)

今度關東に 勅使被指向候儀者方今之時勢深被惱 叡慮偏 公武御一和
 國內一致攘夷之成功可有之以深重之 思召別紙之通被決三事候ニ付速其
 一隨群議之歸可有奉行被 仰遣候天下之重事ニ候間 叡慮徹底候様於
 幕府周旋有之度尤於大膳太夫兼亦丹誠之儀故爲 公武彌可有盡力頼 思
 召候事

但於嶋津和泉茂爲 公武同様存意之旨内々言上之趣茂有之候ニ付今度
 出府大膳太夫申合丹誠之様 御沙汰候間此旨心得可有之被 仰出候事

(和泉に被下切紙寫)

今度關東に 勅使被差向候儀者方今之時勢深被惱 叡慮偏 公武御一和
 國內一致攘夷之成功可有之以深重之 思召別紙之通被決三事速其一群議
 之歸可有奉行由被 仰出候天下之重事ニ候間 叡旨徹底候様周旋之儀
 内々松平大膳太夫に被 仰合候於嶋津和泉茂出府大膳太夫申合先件御趣

意相心得爲 公武宜有配慮賴 思召候事

薩長に被下候別紙寫

第一

大樹早ク諸大名ヲ率ヒ上洛アツテ朝廷ニオイテ相共ニ國家ノ治平ヲ計
議シ萬人ノ疑ヲ散セシメ皇國一和ノ正氣トナシ速ニ蠻夷ノ患難ヲ攘ヒ
上ハ祖宗ノ 神慮ヲ慰メ下義臣ノ歸嚮ニ從ヒ萬民ヲ化育シ天下ヲ泰山
ノ安ニ比セラレ度事

第二

豊臣ノ故事ニヨリ沿海五ヶ國ノ大藩ヲ以テ五大老トシ國政ヲ咨決シ夷
戎ヲ防禦スルノ處置ヲ爲シメハ環海ノ武備堅固確然トシテ必夷戎ヲ掃
除スルノ功アラント
思召候事

第三

一橋刑部卿ヲ後見トシ越前々中將ヲ大老トシテ幕府ヲ扶ケ政事ヲ計ラ
ムメハ戎虜ノ慢ヲ受スシテ衆人ノ望ニ協フヘクト 思召候事

薩州に再度被下候二通

古今之時勢不堪傍觀嶋津家一同擧三國拋身命勤王攘夷之旨趣言上不斜
御満足思召候今般關東に 勅使被指向偏ニ君臣御合體國內一致攘夷之成
功可有之以深重之 思召被 仰下候ニ付 勅使ニ引續三郎出府可周旋去
十二日以書取被 仰付候處越前々中將國政關係之儀於關東取計候段 叡
慮符合 御安心 思召候右ニ付猶又別紙之通 御沙汰候間 叡慮之旨徹
底候様盡力可有之深御頼 思召候
右之段内々 御沙汰候事

（長州へ再度被下候一通）

一中山家ニ於る長州家老浦鞆負招演舌大概

此度 勅使被差立三ヶ條御治定被爲在候ニ付於關東大膳太夫周旋之儀
頼 思召候旨過日書取二通ヲ以被 仰下候處此度田安後見差免越前御
用談として折々登城之儀言上模様替ニ付尙又別紙之通被 仰遣候此趣
相心得周旋可有之可申通候事

別紙寫

一橋刑部卿越前々中將等之儀

（右者薩州へ被下同斷に付略之且但書越前上京之儀薩州而已ニ而長州
へ者御沙汰無之候事）

（勅使被下

貳（四枚ノ内）

五月廿日 勅使へ被渡一紙 演舌書老中所望用意

先年以來外夷一條往々

叡慮ニ不被爲叶御憂苦ノミ被爲在候處昨冬 和宮御下向も有之御一和ニ
而十年内ニハ必可有掃攘御請も有之先被安 聖慮候折柄松平大膳太夫
公武之御爲致周旋候處浪士共及蜂起不容易次第ニ候間島津三郎取鎮候得
共既天下擾亂ニも可及形勢ニ而深被惱 叡慮候尤自他言上之筋ニ御拘泥
之儀ニハ無之候得共唯々國難之增長を歎 思召候無國難ハ即天下之幸天
下之幸ハ即徳川家幸と深被回 聖慮別紙之通被 仰出候間速に奉行可有
之候事

（勅使へ被下

三四枚ノ内）五二十大原渡シ

三ヶ條御書取寫（原朱書）此括弧中ノ文岩倉具視自筆

第一

大樹公早ク諸大名ヲ率ヒ上洛アツテ 朝廷ニオイテ相共ニ國家ノ治平ヲ計議シ萬人ノ疑ヲ散セシメ 皇國一和ノ正氣トナシ速ニ蠻夷ノ患難ヲ攘ヒ上ハ 祖宗ノ 神慮ヲ慰メ下ハ義臣ノ歸嚮ニ從ヒ萬民ヲ化育シ天下ヲ泰山ノ安ニ比セラレ度事

第二

豊臣ノ故事ニヨリ沿海五ヶ國ノ大藩ヲ以テ五大老トシ國政ヲ咨決セシメ夷戎ヲ防禦スルノ處置ヲ爲サハ環海ノ武備堅固確然トシテ必戎夷ヲ掃攘スルノ功アラント 思召候事

第三

一橋刑部卿ヲ後見トシ越前々中將ヲ大老トシテ幕府ヲ扶ケ政事ヲ計ラシメハ戎虜ノ慢ヲ受ケスシテ衆人ノ望ニ協ニフヘク 思食候事

（勅使被下

四四枚ノ内）

大原へ五二十渡寫）

一橋刑部卿越前々中將等ニ儀御ケ條書ニ通被 仰出候處去十五日大樹年頃ニ付田安大納言後見願ニ通差許越前々中將國政可關係被申付候由言上有之就る者後見ニ儀強る者被 仰出兼候得共何分内外不容易形勢ニ候間深被遊 御案痛以一橋被登困候方可然 思召候間但名目ニ處可爲輔弼歟且越前大老職ニ事爲家門ニ間流例ニ邊ニる者可指支候得共先件非常ニ所置ヲ以可被申付

思召候但是以差支候者政事物惣裁職ト稱候る茂可然思食候

但越前々中將儀

思召之通相成候上ハ方今内外危迫之時節ニ付今年秋中上京有之國是之
議論被聞食度候

（五廿一以具視朝臣島津へ渡寫）

但陽明ハ被達
分ノ取計也

今度 勅使被差向候 叡慮偏ニ國中一致之御趣意ニ有之候間龜暴之儀
出來候者深被惱 宸襟候事ニ候元來是迄被届 叡慮も全ク國中平穩
ヲ厚被 思召候御事ニ候間末々ニ到迄御趣意不違様厚可申合候事

一 嶋津へ受書事

（原朱書）
右中山忠能自筆

六七 島津三郎御請書

文久二年五月廿二日

一 昨日被 仰渡候

御書附之趣委細奉承知候事
一 浪人鎮靜之儀島津石見へ委細申付置候事
一 萬一急變致到來候節
御所御警衛之儀も同人へ申付置候事

五月廿二日

島津三郎

六八 覺書並に宿割

文久二年五月

- 一 廿二日ノ事
- 一 和州行違ノ事
- 一 十二日十八日書取ノ事
- 一 四月十六日和泉二番ノ事
- 一 昨日内談二番ノ事

- 一 還俗關白ノ事
- 一 和宮御風儀已下兼御所望條々ノ事
- 一 同今春御上京御延引明亥年秋御上京ノ事
- 一 宮女房面會兼承知事
- 一 惣上下とも薩州飛脚ノ事

宿割

休

五月廿二日 大津泊
 廿三日 石部 水口
 廿四日 坂下 龜山
 廿五日 四日市 桑名
 廿六日 佐谷 宮

池鯉鮒 廿七日 岡崎
 吉田 廿八日 新井
 見附 廿九日 掛川
 嶋田 六月一日 岡部
 府中 二日 興津
 吉原 三日 三嶋
 箱根 四日 小田原
 藤澤 五日 程ヶ谷
 河崎 六日 品川
 七日 江戸着

六九 野宮定功より中山忠能宛書翰

文久二年五月廿五日

御所勞如何被爲在候哉別段不相伺御無沙汰恐入候尙御保養專一存候

兩寺御法會之節從來人々迷惑ニ付拜領物之儀先達而貴君にも一寸御咄被申置候彌被致勘考候ニ付別紙之通無思召哉昨日坊城被爲見候三殿へハ一昨日被掛御目候由候

大樹上洛ニ付入用之道具類新調可有之候ハ、唯今ハ申付無之者漆器類不相調候旨執次伺出候ニ付左候ハ、先入用ト存候品書付候様坊城被申付候ニ付別紙差出候由昨日飛殿小子へ被爲見尙貴君へも御相談可申坊城被示候如何思召候哉愚存ニハ彌上洛有之候而も餘り持上無之様致度物ニ候多葉粉盆ハ新調可有之歟其餘ハ一切御有合之品ニ而宜敷譯ト存候

三卿三家之御あしらい方如何之哉哉平多葉粉盆ニ候哉左候ハ、御有合見苦敷候間新調可有之哉寛永之例不分明トハ存候へとも十分可取調候三卿など三方あしらいも過分哉茶臺も平茶臺哉

猶御熟考希入候也

五月廿五日

中山殿

定功

七〇 野宮定功より中山忠能宛書翰

文久二年五月

追申御端書承候甚々難物苦心千萬ニ候何卒程克仕度存候事ニ候也御細書拜見候抑久殿御書爲見給一見仕候一昨夜投書ニも有之由も在役六ヶ敷候間被辭申様又々小子ハ心添可申入昨日殿下御内命無據御請申置候處昨夜小子へも久殿御示不計符合候故少々安心申入易今朝御答ニ申入候處御返書有之今日早速被辭申候旨ニ候此儀先剋捧書之節可申入之處及漏脱候故只今態々御示ニ相成恐入候吳々意外之事共久殿甚々氣毒千萬成事ニ候萬々拜上可申述候也

乃刻

中山殿

定功

七一 和州出立延引に付書面

文久二年五月廿五日

上

請

乍恐以書取奉申上候

益御機嫌好被遊御座恐悅至極奉存候陳者昨烏御沙汰被爲在候主人書取之儀今朝指上候様可仕之處大ニ延引相成奉恐入候則別紙奉指上候御覽之上御心付も被爲在候ハ、認直しニ可相成不被爲在御覆臈被 仰下候様奉希上候先者右之段勿々奉申上候恐惶百拜

五月廿五日

上

請

以別紙奉伺候昨夜傳奏様ハ別番之通被 仰下候右ハ吉信江戸表ハ罷越候も和州出立延引ニ相成候儀故被 仰合候御用之筋ハ不相達方宜ト之思召ニ被爲在候ハ、尙又以急使吉信へ向ケ申遣候様可仕ト奉存候尙御模様被 仰下候様御内々伏而奉願上候恐惶頓首

五月念五

七二 侍從中山忠愛の儀に付正親町公董と往復書翰

文久二年五月

同紙御免御安全奉賀候扱侍從殿事昨夜深更ニ相成所々へ御出今日御不參ニ付御心配之由御尤ニ存候昨夜八ツ前比御出ニ候へとも是ト申取留候次第も不承候唯今之形勢ニテハ何共見通しも不付事故御本人之御趣意通致試度由御咄し之事ニ御座候ケ様々々と申事ハ^{虫損}承候へとも何分再三御勘考之上ニテ御治定之様申置候事ニ候今日姉小路ニも面會相尋候處同様之事之由ニ候しかし有志之人々も無沙汰同心致候氣遣ハ無と存候何分一途

ニ思込之御性分故其邊御案し申入候事ニ候是と申次第ハ不相分候何レ不日參上萬々可申述候仍早々御答迄如之亂書眞平御免奉希入候也

乃刻早々火中願入候

昨夜御出之事も何か内々と申事故

左様御承知希入候也

上忠能 公公董

正親町少將殿

内用御火中

(原朱書) 右ハ正親町公董自筆ノ返書ニシテ前書へ直ニ認メタルモノ

七三 和州上京の節行違通行云々達

外に書類 文久二年五月

一於道中和州上京行違之砌取合無之無事通行可致御沙汰之趣ヲ以相斷分離可致事

(先止メ但與ケ條尙可在達事)

久世大和守上京被 仰付去十九日關東可發足處前十八日依所勞御理申上候ニ付板倉周防守上京可被 仰付哉之趣被 聞食候右者方今差懸候御用向急事ニ候間以 勅使被 仰出候ニ付昨廿二日大原左衛門督致發足候就而者大和守上京否之儀ハ去廿日以別之急使可申達旨所司代へ被 仰出候通ニ候全體此度之儀ハ不容易速急之御用ニ付去月十六日被 召候處到此頃右様遲滞之段ハ如何之儀と被 思召候尤大和守上京候者他事ナカも被 仰舍度御用向も被爲在候得共右御用向等ハ態々老中上京ニも及間敷被 思召候間以別紙被 仰出候自所司代申達ニ而相調ヒ候様被遊度候關東ニも御用多御時節故先當時之處ニ而ハ周防守上京ニも及間敷被 思召候間此段宜申達御沙汰候事

(和州上京被止候ニ付) (原朱書) 此括弧中ノ文岩倉具視自筆

世上形勢不容易次第ニ付今度大和守上京之儀被 仰下御請之儀御待合之
處日數相立左右言上無之ニ付尙又異變難計模樣ニ相成不得止 勅使被差
向候旨被 仰出其砌大和守上京暫御延引追而 御沙汰之旨可被 仰下御
内談之處 勅使者其儘被差置大和守ハ矢張被召寄事情篤ト被 仰含候方
可然言上ニ付其分ニ被差置候處今日ニ到リ候而者 勅使來廿二日發足大
和守來月四日上京ト申儀僅之日合ニ御不都合之儀殊ニ御用筋ハ一事ニ
而兩端ニワタリ東西行違之筋出來候茂難計且ハ老中第一之人體輕易之御
取扱ニモ當リ可申哉深 御心配被爲在候其上 勅使下向之處於關東老中
第一上京 叡慮伺中之儀ニ付歸府無之而ハ 勅答難致旨被答候節者無益
之日數も相掛り候ノミナラス内々承知之通薩長兩家ハ周旋之事被 仰下
有之候ニ付而者對談之始末ニヨリ萬一行違等出來武道之意地ヨリ異變之
筋起發候も難計右様之儀ニも到リ候節ハ元來之 叡慮ニ背キ實以難事ト

被 思召候此旨三浦七兵衛ヲ以大和守道中迄早々申遣可相成候者引返歸
府致シ於關東 勅使相待無異之商量有之候様被遊度 思召候是迄人心騷
擾ニ至り候儀此姿ニ而徒ニ時日ヲ送り候者此上内患之筋相生シ不申哉ト
深 御苦心被爲在候乍去上京ニ付台命之旨も有之默止シ難キ次第も有之
候者尤不得止儀兼而若狹守ヨリ言上之通上京ニ而も御宜候得共前件之次
第吳々 御案思被遊候ニ付道中精々被差急上洛有之速ニ 御用向被伺靜
穩之内片時も早々歸府 御沙汰之趣奉行人心和平之所置可有之頼 思召
候事

傳奏様々之御來翰寫

過刻御示之趣合披露候去二十日御達申入候大和守之 御沙汰之儀ハ定
而途中行違ニ相成候其儘に被致置候哉若哉又見合候様道中ハ被申遣候哉
御尋可申入 御沙汰候事

（主人の傳奏様之返書控）（原本書）本文吉信ハ所司代酒井若狭守公用人三浦七兵衛ノ實名

過刻申上候一條即言上被成下候處去ル二十日被 仰下候大和守之御沙汰之儀者即刻家來吉信下向仕候處今更大和守所勞ニ亦上京難仕旨申越候ニ付最早相達候ニ不及儀と奉存候間吉信引戻之儀申遣候得共吉信儀極々差急罷下リ候事故於途中追付不申段も難計奉存候御尋之儀ニ付此段奉申上候事

五月

中山忠能履歷資料 卷十

一 覺書 文久二年六月一日

戊六月一日出ス今曉八時頃英吉利人宿寺高輪東禪寺松平丹波守徒 伊藤軍兵衛

仙臺家老

遠藤文七郎

用人

氏家秀之進

今日伺定 一二番事

○一細黒土

- 一周旋一昏ノ事
- 一三郎官位御推任事
- 一土州停京事

二 近衛忠房より中山忠能正親町三條實愛宛書翰

文久二年六月一日

尚々所勞亂書書損之儘仁恕可給候也

過剋者前左府の歎願之一封差出サレ候處殊外之御時宜内々以源亞相示給何共恐縮々々仕候右之邊前左府へ申入候處甚當惑恐縮々々之次第此上者兎角不申上候儘 御沙汰次第速ニ御請可申上決心ニ候仍一封御返却之儀御頼申入度との事ニ候且又還俗出仕之義實以齒痛面體大ニハレ大困窮今日も醫師招ヒルヲ掛候様成次第兩三日ニハ出仕致兼候間十日頃迄之御猶豫奉願度趣ニ候何も明朝源亞相招巨細ニ可申入候得共餘リ之恐縮不得止事兩卿迄今晚荒増御請之義申入度由申付候也

六月一日

忠房

中山大納言殿

三條大納言殿

答

前左府一封兩通御返却給拜承候猶早々可傳候仍御報迄如此候也

六月二日

忠房

中山大納言殿

三條大納言殿

三 幕府達書

他一通 文久二年五月廿四日

戊六月二日具朝臣の來

五月廿二日於柳營諸役人の達

只今 上意之趣誠ニ奉恐入難有御儀ニ候何れも厚相心得 思召之行届候様一途ニ心掛抛身命可被勵忠勤候猶追々被 仰出候品も可有之候間心得

違無之様可被致候

上意之趣

近來御政事向姑息ニ流れ諸事虚飾を取繕ひ候より士風日々輕薄を増 御
當家之御家風を取失ひ以之外之儀殊ニ外國御交際之上別ニ御武備充實ニ
無之ニは不相成就ニ者時宜ニ應し候御變革被取行簡易之御制度質直之士
風復古致し 御武威相輝候様被遊度思召候間一同厚相心得可勵忠勤候
脇坂再勤之條

猶以其他之面々にも可被達候以上

一筆令啓達候 公方様益御機嫌能被成御座候間可御心易候將又昨廿二日
於 御前脇坂揖水事御懇之以上 上意連判之例被 仰付候條可被存其趣候
恐々謹言

五月廿四日

御老 中 四人

酒井若狹守宛

中務大輔事御入用掛大和守紀伊守和泉守周防守申合可相勤旨被 仰出
候條可被得其意候以上

五月廿四日

老 中 四人

同上

脇坂揖水事中務大輔と改名候以上

五月廿四日

老 中 四人

同上

中務大輔座頭之儀可爲紀伊守次之旨被 仰出候間可致得其意候以上

五月廿四日

老 中 四人

同上

中務大輔事外國御用取扱被 仰付候此段爲心得相達候以上

五月廿四日

老 中 四 人

同上

右中山自筆寫

聞につけ國患を深く憂といへとも世事絶て暗然たり朋友信を捨て断然としてさらに無音にも角にも己かあしき故成へし
コンナヲテ天下治ル物ナラハトウヨリ引テ樂ヲスヘキニヤセ馬ノ重荷ヲオヒテタトル間ニ驚カサレシ猿大ノヲ
イツハリト云ナス人ノ心ヲ其イツハリヲ思コソヤレ
夢にたにあしきをためる獸の我にはつらききはをふれけり

真心も偽といふ世の中の尙行末のたてそあやうき

右中山自筆寫

四 庭田宰相典侍より橋本實麗宛書翰

文久二年六月三日

さつき十五日御認の御ふみ水無月二日着致くりかへし拜見忝り
雨中日くしめくしくおはしまし候へ共いよく 御所方御機嫌よく
成らせられ候御さためて度忝り 彌此御地御あん全の事めて度 和
宮様にも御機嫌よく成らせられ候めて度しかし先日々とかく御すその御
工合御よろしからす御こまり遊はし候所いつまでも御同様様御さし引ニ
あらせられ候去朔日より御かり床にて御用心遊はし御ヒも日く伺御薬
も御手當出来小堀祐益申しし御すそ御附薬も上りて御手當も出来
りまゝ其内にはおひく御よし様の御事御氣先などは御常の御通り
にあらせられ候御せんも御程よく上らせられ候まゝめて度ふかく御案し

御申入無やうと存り宮様は右の御次第ニて此ころは成らせられす候
まゝ日く巳剋頃到大樹様天璋院様御同道ニて宮様の御かたへ御み舞ニ
御出にて御座候御婚禮後一兩度は御風にて御かり床もあらせられ候へ共
其節ハさ様の御事も御座なく候に此ころハ御ていねるニ成りと申物
かいかゝやらと申合りそなたにも御揃あそハし何のく御障りおは
しまし候ハす御まへ様先日の御むさくも御よろしく日く御出勤との
御事承りめて度御歡申入り左様ニ候へは關白様を田安へ御注反の事
ニ付あまりく御不都合御ふしんニもおほしめし三通共御寫しを御見せ
にて久世大和守へ明白ニ御聞遊ハし度と子細を御尋の所四月卅日出ニて
去月七日ニ老中ニハ似合ぬ御返事参り候との御事扱てく何かくわか
らぬ事しかし御まへ様より言上の御次第ト私を申上候のと相違なく御安
心との御事御尤く大和守も何の事か扱々ふしん成事此度所ろうニ付退
役致ていかんノ間仰出され候由昨二日ニ御表より 宮様へ申入に御座候

扱此度實く恐入候御次第出来に付 御上にも深く御心配様臣下御一同
も御心配との御事扱くおとろき恐入り先日よりちらくと風説ハ
承りたく恐入御案し申入居候所昨二日の御ふみニて實くおそれ入
右ニ付 大樹様へ宮様より御直く御申入遊ハし候様との御事に
て御されたを御蒙り觀行院様迄御申遣しとの御事御文の趣とくとく私も
拜見致おそれく去なから徳川家御あつきくおほしめし様の段
さそく大樹様ニも御かしこまりの御事と存上少し御すその御工合も
御よろしからすなから早そく宮様御まへ様々の御文御持参ニて御直く
御わけからハ仰入られ候進しられ候所猶御跡を御返事の由ニて御落手と
の御事故御上置にて還御成られ候所上臈萬里小路殿御使ニて二三日か五
六日ハとめ置との御事ニてあらせられ候所今三日夕方御直くに仰られ
度御事あらせられ候まゝ宮様御すそきつう御こまりニあらせられ候ハ
成らせられ候様との御事ゆへすくく成らせられ候所昨日の御ふみ御

かへしにてケ様の思召し様にてあらせられ候得はふかくかしこまり
 思しめし候由にて御厚く御禮の御さた宮様を仰上られ候様との御
 事のよし表一同も深く有難りにて御禮申上度申居候由御直御咄
 しニあらせられ候由また宮様還御成られ候節もくれもよろし
 く仰上られ候度御申遊ハし候由にて觀行院様私へ宮様を伺ますニ
 有難く宮様ニも深く忝りられ候實御かしこまりな
 くてハ成不申是も餘程御縁組の御かけ様あらせられ候まふそ大
 樹様よりハ何とか御所御大切ニ遊ハし候やうニと存上事何分何
 分御心配様の段ふかく恐入とふそおほしめし通りニ成られ候
 公武御合體御一和の御事御たかひに祈右の御次第故宮様の御事
 ニ付議奏衆御使の事ハ御さた無候由大原殿左衛門督御推任にて御使 仰
 付られ候去十六日御出立の處御さし支の事御座候て去廿二日御出立ニ相
 成候よし尤島津和泉と一諸ニ御下向との御事とふそ御所の思しめ

し立られ候様くれ存上とふそ明年御上洛の御時分おたやかな
 らす候てハいかと御安んし申上候去月廿日に御急便にて觀行院様迄御
 信心の事御申上あそハし候得とも猶又とふそ精々御信心あらせられ
 候様申入候様との御事承り早そく宮様へ申入へハ御満足御
 満足日御信心あそハし成らせられ候まい私へも御深切ニ仰
 下され候忝り精々用心信心は致へ共しせんいか様の事に相
 成候とも道ならぬ御事にて此君の御爲なれば致方なく私の一命ハしれ候
 者た此上御威光立成られ候御一和天下泰平ニ相成候様くれ祈
 めて度かし

實おそれ入候世中さそ御上ハ御心配様臣下御一同も御心配
 ハかきり無と御さつし申入先此ころも仰立られの奥
 向ハおたやかのかたとふそ何事も思しめし通りと祈
 宮様おひ御なしみつきりかと大樹様にも忝思しめし候由にて御し

たしみの爲とて此度御内へにて 御所 親王様 准后様へも御進獻
物遊度よし故 宮様より御傳獻あそはし候事ニあらせられ候 宮様よ
りも何そへ上られ候様と御せわあそはし候て御献上ニ成かね候其御
品物三日入ニて明四日出 由ニ候此ふみハ別飛脚へ出 一寸
御咄し申入 折から御用心へあそはし候様ニと存
やす様侍従様御はしめへよろしく御申入あそはし被下候能登殿へ
も御入筆の様申傳へ 得ハ忝りニて又よろしく申入
度申され候まつ 私も無事ニつとめ居 ま御心安う思しめし
被下候折から御用心へあそはし候様にと存 いつものなから亂書
御めんへめて度かしく

水無月三日夜認

宰相典侍

橋本宰相中將様へ

御返事

五 幕府達書

三通 文久二年六月

六月三日

周防守宅の家來呼出可達覺

酒井若狹守

去ル廿八日宿次ヲ以奉書御用有之候付出府可致旨達候間此段爲心得申達
置候事

六月五日

松平春嶽

以來折々登城可致旨被 仰出候付は隱居之儀ニも候間爲御手當年々米
壹萬俵ツ、被下旨被 仰出之

中山忠能履歴資料卷十 (文久二年六月)

右於御白書院鷺之間之御杉戸ノ際ニ周防守申渡書付渡之老中列座

六月六日

御膳奉行

奥御右筆

中村又兵衛

御膳奉行

奥御右筆

河田貫之助

儒者被 仰付候

右於御祐筆部屋縁頗ニ周防守申渡老中列座若年寄中侍座

六月六日

六 老中より駐日英國代理公使ニール宛書翰

文久二年六月六日

英吉利ス人の書翰

貌利太泥亞

シヤルセダヘート兼

タンシユルセチラール

エキセルレンシー

イシシトシヨシニール

以書翰申入候此程其公使館ハ狼籍者忍入不慮之害有之護衛之兵卒貳人絶命ニ及ひしに防禦不行届惡徒をも取逃候義失面目候事に候乍然其元無恙段ハ悦ひ思ふ所也右始末即時大^{不明}承知無之深く心配被致岡部駿河守いさの申合即日訊問せしめられ且手疵受し者療養之ため典醫をも被差遣候乍去我國ニ於て尤重き禮典ニ付我等ハ別段答をも訊問せさるゝ之處口演ニ而者後來之證とならざる所を我等ハ之書翰を望まるゝに任セ此段申入

候藩士之内自殺之者ありといへとも其節詰合之護衛之輩何れとも不行届
之事疑敷事共もあれば夫々速に吟味も申付候事實相分り次第尙又申入候
爲向後警衛其筋に嚴重ニ申付候事ニ候拜具謹言

六月六日

脇坂中務大輔
水野和泉守
板倉周防守

七 大原重徳より中山忠能・正親町三條實愛等宛書翰

文久二年
六月七日

主上 儲君親王 准后増御機嫌克可被爲渡恐悦ニ存候抑旅行無滞今日着
府候處爲城使板倉周防守差添横瀬山城守入來近日可有對顔之由候仍申入
候御序之節宜預御沙汰候也恐惶謹言

六月七日

重 徳

中山大納言殿
三條大納言殿
飛鳥井中納言殿
久世宰相殿
宰相中將殿

八 幕府達書

文久二年六月

六月七日

上使

周防守
高家差添
横瀬山城守

勅使

大原左衛門督

右者到着ニ付被遣之

御座間

新番頭格

奥勤

田澤對馬守

外國奉行

右御直ニ被 仰舍之

今夕周防守宅ニ家來呼可達覺

松平伯耆守

當三日宿次を以奉書御用有之ニ付出府可致旨相達候間爲心得申達候事

大目附ニ

御目付ニ

諸役人之義者平常御用多相勤候事に候間已來暑寒歲暮老中若年寄ニ相廻
ニ不及候

右書取周防守渡之

六月七日

六月八日

表御右筆

樋口考弟

菊地鍋五郎

奥御右筆留物方兼務

右於土圭之間周防守申渡列座無之酒井右京亮侍座候

六月九日

御側衆

藥師寺築前守

名代

青山安藝守

遠山か

御役御免菊之間縁頼詰被 仰付候

右於芙蓉之間周防守申渡老中列座

明十日五ツ半時揃ニ

勅使大原左衛門督御對顔被 仰出候

九 御沙汰書 文久二年

關 白

當職内覽氏長者隨身兵仗等辭退之事

近頃所勞困苦且追々及老年速快復難量之旨被言上可被召止之處依方今繁

務之時節雖殘念 思食依請被 聞食候事

右中山自筆の草稿原朱

一〇 久世通熙より中山忠能宛書翰 他一通 文久二年六月七日

御清健恐悅存候誠昨日者御面勤相伺候處御細答何カ相心得畏入候存外之間違等有之由扱困入候物ニ候嘸々御配心奉恐察候猶拜面可申伺候儲今日可令參 朝之處今以平臥之仕合段々永引恐入候得とも不參仕候別段當番に者不申入候間宜願入候併惡方ニ者無之候間一兩日ニ者何卒令出仕度存居候事候御參候ハ、乍憚宜く御傳聲願入候殿方ニも御苦勞恐入候仍如之候也

六月七日

中山殿

通 照

- 一 具不審事
- 一 若へ送物事
- 一 東門事
- 一 中下旬宣下事
- 一 大原返事并長州の狀
- 一 久世不參事
- 一 若へ別賜事書付
- 一 殿へハ今日武傳を被申入 聞食ハ
- 一 アトノ事

右中山自筆の覺書

一一 大原重徳より議奏宛上申書

文久二年六月八日

口 述

本紙令言上候今日着府城使等有之候併近日登城可有とハ不申候御用談寛急如何と相尋候ニ付急ニ趣相對候左候ハ、猶直ニ申入可成丈早ク可申入猶明日從高家可相達旨ニ候然レハ何レ近日ニ相違無之候間任流例ニ文ニテ令言上候猶日限治定候ハ、可令言上候仍別紙ニ令言上候也

六月八日

議 奏

御中

右大原重徳ノ書面歟原朱

一二 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年六月十日

二 通拜見御示ニ趣敬承仕候上洛ニ義存外頓發ニ相成驚入候 勅使三郎等へ御申達ニ旨先本多可申通被仰遣候由承存候右に付明朝參集承存候下

宜も一兩日脚部不工合候へとも押可令參上候右之旨具へも可申入候内
公へも内談一々敬承猶可申達候別紙二通正返上候也

六十

叟

因 大 公

内々

一三 大原重徳より中山忠能正親町三條實愛等宛書翰

文久二年
六月十日

主上 儲君親王 准后増御機嫌能可被爲渡恐悦存候抑今日登 城 御使
無爲相勤候依申入候御序之節宜預御沙汰候也恐惶謹言

六月十日

重 徳

中山大納言殿

三條大納言殿

飛鳥井中納言殿

久世宰相殿

宰相中將殿

一四 覺書

文久二年六月十一日

控

文久二六十一於 御前書議草即日御内定實美朝臣へ遣す同日同朝臣參
内示談下官正三〇島津の容堂の事被示六十二本多彌右衛門へ示
右中山自筆の覺書か原

一五 中山忠能より三條實美宛書翰

文久二年六月十一日

追申本文之趣尤極御内々之義ニ候間必々他漏無之様御取計御含可給候

也

彌御安全珍重存候抑内々御尋申入候土州當主今歲出府年々候處因所勞延引被願候歟之説有之候右は實事ニ候哉内實ハ伏見通行も有之候ハ、京都へ立寄ニても有之候様被遊度御内々 叡慮ニ被爲在候尤兵なとヲ被 召動候と申様之義ニハ一切不被爲在候へとも方今世上之形勢何共深被惱宸襟候就る者薩長兩藩厚周旋之次第粗御承知之通り候於土州も御内々御依頼被遊度御事も被爲在候ニ付通行之便 思召之邊も被 仰出候へハ至極穩ニ宜と被 思召候處先文所勞延引之由被 聞食深以 御殘多被 思召候凡いつ頃出府通行ニ相成候哉御内々被 聞食度との御沙汰ニ候仍此段密々貴公迄御尋申入候御内調之上否御答可給候也

六月十一日

忠 能

三條羽林公

内用

一六 岩倉具視より中山忠能正親町三條實愛宛書翰

三通 文久二年六月十二日

一今朝御答畏存候御命之趣一々承候別段御請不申上候
一秘書類御返し慥ニ落手仕候
一佐竹藩平田信太郎今朝面會承候處昨日小河承候とハ少々相違候今度模様主人承知ニ得内意出京ト申譯ニハ無之候本人申候ニハかね々勤 王之志有之事ハ東北ニ不耻心得ニ候主人ハ勿論家老宇津宮帶刀用人ニ川尻正助石井宮作飯塚傳也右等正議ノ由此中ニも輕重候得とも宮作杯ハ殊ニ一物ニ候此外要路ニ無之分ハ數多有之候右ニ付御内 勅杯こそ御六ヶ敷候共元々御内 勅被下候島津御役人中ヨリ御内沙汰ニ御佐竹家ハ有志之旨御聞及候間同人ハ可申語ト丈御沙汰相成嶋津佐竹ハケ様之御内沙汰も有之候貴國ハ如何と被誘候ハ、速ニ可相應候

事明鏡トノ事ニ候右ニ至リ候ハ、佐竹家之面目尙又東方大小名語合同志之輩嶋津家ニ附屬可爲致トノ事ニ候

一右平田延太郎見込ニホ主人内意又者自分ノ願候と申ニホハ無之候元々本人願候抔有之候ホハ一分主家ノ心配と申居候吳々も只從御所島津へ御沙汰と申丈ニ候

一本人至ホ實貞之者と見受申候若々右彌御内沙汰相成候ハ、神速ニ發足先歸府小子方へ罷出候所ケ様之御様子ニホ候ト申述嶋津ノ沙汰次第可相應手筈可仕トノ事ニ候

一本人立願と申ニホ無之候得共此機會ヲ不失様と頻リニ申居候口氣實ニ投身命被行度様子ニ候

一佐竹當時至ホ貧窮ニ候間多勢繰出し抔ハ六ケ敷候得とも少々之事ハト申居候小子夫ニホ不及哉右ハ彌非常之時之事只今ニホハ島津ニ力ヲ添關東一新正論ニ相成候ハ、よろしき而已と申居候

二別紙二通著書二組持參に候

一奥羽之間ニホハ伊達家ニ引續キ家柄之由ニ候關東取扱も別段と申居候かねて申上候通嶋津三郎ニも伊達振起候ハ、ト申事頻リニ堀ヲ以申居候重疊ニ存候

一書類被召候事とも何卒御勘考不相成候哉是又小子ニも伏ホ奉願上候右早々言上候明夕必返事可申入申置候間何卒々々宜希上候也

六十二

追申小子事未だ平松ノ何之沙汰無く右ニ付先々自筆ニホ申上候也

富妍

固君
成君

内啓

右書付候所藤井來り戸塚の堀小太郎來狀之事申來り候本多陽家中卿の出頭藤井正卿の小子へ來り候由何も御承知と存候東風彌正誠の由恐悅々々任便佐竹之事申試候處夫ハ重疊之事長州も上京の外藩のハ島津計之義旁可然御事と存上候且西南ハ追々振ヒ候得とも東北ニハ一人も無之かねの三郎ニも申居候事有之候早々御取行不相成哉と申居候尤堀の來狀ニ亦最早兎角仕候にも不及哉と存候得とも又ノ後日之爲ニ候間何分三郎へ可被仰下同力ニ亦可然事に候ハ、可用不及其義候は、不用候ハケ様ノ之御内沙汰も候得とも既ニケ様ノ正ニ歸し候間御安心可被下只今彼是ニ亦ハ却テ如何抔得と申諭し同心之徒ニ仕置候ハ、ケ様之御時節急度後日御用も有之候まつ一人ニ亦も同志多キよろしく三郎方ハ十分ニ御受合可申上扱右延太郎昨日藤井へ來り候薩ニも平田門人數十人も候間右平田門人數十人も候間右平田へも申合堀小松始ハも實事通シ候様可致トノ事ニ候早々御勘考奉仰候也

六十二

追申此本御覽希上候也

固 公
成 公

富

一七 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰 他二件 文久二年六月十二日

御痛所御困之旨御用心奉祈候方今時勢實ニ御大事御保養迅速御出仕所祈候扱今日被召候間參上候處貴君ニハ御不參ニ付小子へ被 仰下候ニ者獅子王院宮再住且三條故前内府贈官 右は伺 落候 等 御内慮今日可被 仰出旨ニ候即直ニ武傳ハ被 仰下候趣ニ伺候尤尊公ハ右之段可申上トハ不被 仰付候へ共爲御心得啓上候御合置希入候且又此二通并文匣中等唯今妍朝臣ハ到來候間御先キへ披見候上奉傳上候可然御考慮奉願上候仍如此候也

六月十二日

叟

固大公

内々

一久世大和守依病氣願御役御免雁間席
一水野出羽守御役御免前々通帝鑑間席

六月十二日

酒井若狹守

右中山自筆ノ覺書トミユ原

朱

一八 久世通熙より中山忠能宛書翰

文久二年六月十三日

追申申上方不行届ニ付時日押移候内右様之儀ニ及候歟甚恐入候得共無

致方御憐察希入候委細拜上申上候也

御清安令賀候抑去日御尊有之候少將掌侍實母赦免之事申上置候處一昨日
歟頓滅之由就但先日方所勞カ儘ニ不相辨は彼内侍事表向引籠ニ相成候様 御沙汰も被爲在候旨然
上は最早先年之儀流シニ被遊置候方可然存候赦免之義尙又申上候亦ハ却
亦不宜哉に被存候委細は拜上申上候仍早々如此候也

六月十三日

再啓表向引籠ニ可相成候間被捨置候ハ、御宜哉ニ存候尤始末も有之
候得とも御寛大ニ御傍觀之方ト存候也

通 熙

中山殿

内々

一九 中山忠能書翰

文久二年六月十五日

口述

別紙到來候乍御面働内覽且御披露等宜願入候切昏ハ何かゴテツキ且日附も違不分明ニ候間御抑留置希入候也

六月十五日

忠能

相役御參中

二〇 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年六月十五日

昨今之炎暑實に恐入候御安泰奉賀候併御痛所如何と奉存候御用心專一早々御全快所祈候扱今朝毛利登來

大膳太夫去六日巳剋關東出足中山道上京日積り通に候へは廿三日着之趣右昨夜脚夫

着之由

先刻申來候此段申上候夫是ニ付亦も迅速御出仕奉祈候先早々如此候也

六十五

實愛

中山殿

二一 島津三郎より大原重徳宛書翰

文久二年六月十六日

御口上之趣奉拜見候今日高家衆へ御達之御書付御見セ被下難有奉存候扱昨夜中篤と勘考仕候處種々存慮之儀も有之候ニ付別紙之通先剋脇坂方以書狀差遣申候間御心得ニも可被爲成歟と奉存奉備高覽候毎度亂書御推覽奉願候先は右旁如此御座候以上

六月十六日

島津三郎

左金吾様

極御内用

右中山自筆ノ寫原朱

二二 脇坂安宅へ差遣書狀

文久二年六月十六日

脇坂に差遣候書狀寫

先日者舊來御親睦之筋ヲ以御役御離レ御面會被成下別々忝次第奉存候殊ニ隨貴意存慮無腹藏申述候處何も御異論無之安堵致し候夫ニ付尙又熟考致候處何れ天下之御爲と奉存僭踰之罪ヲ不顧左條之趣申述候間御都合次第御列方之御談合被成下度奉願候

一此節 叡慮之趣被爲在久世氏上京之儀被 仰出候處御請及遲滯候ニ付不被爲得止事 勅使被差下 公武御一和御國內一致之趣無之候ハ不相濟被 思召就者一橋越前之兩侯天下之人心歸嚮スル處故御後見御大老ニ御登庸有之候様トノ御趣意誠以恐悅至極之御事と奉存候然處先日粗御咄致承知候得共名目之趣御評義甚御六ヶ敷由其節は愚意何共不

申出態ト差控罷在候得共退テ致勘考候得者存付候義致默止候者却而不忠と奉存不得止事申上候邂逅 勅使被差立被 仰下御趣意纔名目計ニ被爲拘御評議御決定無之候者乍恐優柔不斷と可奉申歎當時不容易折柄舊格先例ニ御拘泥被爲在候者以外之御大事と奉存候ケ様御評議御遅延相成候者又々人心疑惑ヲ生シ異說紛々致流行浪人共蜂起いたし候義も可有之哉と甚懸念至極ニ奉存候若其次第ニ相成候者迎も御國威御挽回之期も被爲在間敷と實ニ恐入奉存候何卒非常之時節御出格之譯ヲ以一日も早ク御評決 勅諭御遵奉被爲在候様伏々奉希上候尤一橋君御後見之義者近頃田安君御免ニ相成候故際々之所如何と之御評義に奉伺候御尤之御事ニハ御座候得共不容易時節被爲惱 宸衷態々勅使被差立被 仰下候御事ニ御座候得者快ク御請被爲在候ハ、公武御一和之御實情御通徹被爲在候御義ニ天下有志之人心も此御一條ニ奉感服 御國家御安泰之基ト乍恐奉存候越前君之義者御家門之故聊御

故障之御事も御座候ハ、御大老同様御政事總裁有之候様屹ト被仰渡一
統へも右之趣承知仕候様御達被爲在候ハ、御國內靜謐人心一和罷成
無此上御美事ト乍恐奉存候

一長州之事粗申出候處御答振不分明致承知候此義者先頃脇方々當五月二
日大膳大夫々之上書落手仕虚實ハ難量候得共愚意聊疑惑いたし候御上
洛之御一條者實以寛永以來之御盛舉ニ申上候迄も無御座御事ニ御座
候得とも先日も粗申上候通何ぞ當年中不被爲行候者天下之人心紛亂
仕ニも有御座間敷來秋々先ニも被爲行候ハ、可御宜歟ト奉存候貴公
様ニも其御趣意ト致承知候然ルニ長州者頻ニ此義催促申上候姿ニ相見
得甚無心許奉存候方今之所ニ者 勅命通越候御登庸之上當秋上京被
命外夷御所置國是之御議論言上有之 叡慮御伺相成候方可然歟ト奉存
候急速ニ御上洛被爲在候御道中宿々及迷惑且於京師種々御評議決兼
候御事共被爲在候ハ、以之外之御大事却ハ 皇國紛亂之基歟ト乍恐奉

存候大膳太夫爰許に罷居候ハ、小子面會致直談候所存も有之候得共小
子着を乍存道を替前日發足之次第何共不審千萬心底難量御座候長門守
出府之由ニ者候得共家督ニ無之候得は決兼候義も可有之候ニ付相成事
ニ候ハ、只今之内大膳太夫再致出府候様被 仰出小子ト深厚談合いた
し候様被仰下候義者相叶申間敷哉左様御座候ハ、趣意致一致 公武之
御爲別ニ可然御事ト奉存候

右之趣家督ニも無之身分ニ候得共亡兄遺言之一筋も有之不得止事不
肖之身ヲ忘レ存慮十分申上候間若忌諱ヲ犯シ候僭踰之罪御糺シ有之
候ハ、何様共可奉畏候此節國許致發足候ヨリ身命ヲ抛 公武之御爲
周旋仕候義ニ敢テ功名榮利ヲ貪候趣意ニ無之 公武御一和御國內
一致相成候ハ、愚身者如何様罷成候も曾テ遺憾無御座候此段深々
御汲取被下度奉伏願候以上

六月十六日

右筆者不分明○印以下中山自筆ノ寫原

二三 中山忠能書翰草稿 文久二年六月

御所御始彌御機嫌能被爲渡御安心可有之候彌御安全令賀候御家内麻疹流行賢孫ニハ庭家へ御出と申様之御事ニ承候併追々御順當之義と存候御休意可有之候扱十日御登城後迄之御様子委細被示何も申上候事と存候上にも大ニ御安心御満足被爲在候段々御苦勞之程色々と申伺候事ニ候尙又追々御應對之義と被察候宜々御賢考御熟談可給候

一若州義大樹公被召候に付彼家來共々舊冬兩朝臣ヲ以長役御内沙汰之邊ヲ申立色々申立寔以令心配難澁之事共ニ候彼節ハ間部ナト出頭之風聞專ラ有之候ニ付被仰遣候由ニ承及候事ニ候下官重病中ニ候へとも委細ハ自具朝臣被申入候由ニ付不申入候方今之處ニテハ何分在京致居候テハ御所々被仰留候歟之疑念ニテ衆人不服之様子ニ候へハ宜御含可給候例

候例之事情ヲ委細ニ不聞糺遠察ニテ種々ノ暴説ヲ唱出候由以外之事共ニ候

一姫路九日京着上ノ寺ニ在留候何事もなく候十六七日頃ハ流行病餘程重く困之由ニ候

一大膳太夫六日發足廿三日着之旨申來長門守十九日當地出立之筈ニ候唯今承候へハ大夫供流行病ニテ旅中延滞廿六日着トヤラ

但不慥候御警衛心配候

一麻疹大流行仲間も十餘人ニ及候家來士分下部之分殊更ニ多く何方も殊更無人ニ及世上一同ニ相成出仕ニも差支候他熱病も流行上下差支勝ニテ甚困入候

一一橋一件如何候哉越前も一朝臣ニテハ何ヤラ心細キ事ニ存候
右中山自筆ノ草稿原

二四 岩倉具視より中山忠能・正親町三條實愛宛書翰

文久二年六月十七日

昨日ハ御返書畏存候別段一々御答不申上候

大原書狀三通令返上候返上延引恐入存候

從千種被申上候加増之事只今之所ニ露顯ニハ御不都合と存候何卒御

勘辨ニ書取ニ武傳^本へ先披ソコニ思召有之此儘ニ暫當人ハ沙汰無

之様御返事被出候ハ、若も從前相立候事又 御所方ニも武傳へ急度御沙

汰ニ深思召有之是迄被止候事ニ候得とも今度退役ニ付ケ様、無據次

第二付申來り候ハ、内々ニ取計可申上被 仰置候ハ、如何と存候餘りけ

しからぬ越樽ニハ候得とも右ニ可相成道有そふニ被存候若州被下もの如

何相成居申候哉大坂城代も所勞ニ出足無之由に承候

若州義老中へ御返事御かバひ過いか、と可存又嶋津ニも不審と存候ニ付

今日大原へ得と申遣し昨年之事柄被咄候様申入候風と如何ニ相成候ハ

と申入候

大原同斷 宮天璋院間之事御序ニ程能なれハ重疊と嶋津へ隙有之候ハ
示談可被致都合よろしく候ハ、宰相典侍ニも往反序に御順和之事ニ相
成候様と申遣候

兩條六廿と申入候得共老卿尤無助才存候ニ付任心付申入候

先日陽明參上御約申入引籠候廿一日ニハ參上心得ニ候先日來替り候事も

有之心得置參上之方宜敷殿方ニにも先參上伺候上陽參入と存候別事も

無之候ハ、同日御法樂ニ付先朝之内陽參上と存候此段伺置候仍早々如此

候也

六十七

富妍

承候

固君 成君

言上

二五 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年六月十八日

御安全恐悦存候御痛所如何と奉存候御用心祈入候

一昨日陽明へ午後行向候處少々間違有之スヤ引候間今朝別殿へ行向面談

候處大ニ懸念も有之猶篤と勘辨之上一兩日ニ返答可有之旨被示候間左

思召可給候

一岩倉書狀昨夕到來傳獻延引御斷申上候

一大原過日之狀三紙ハ陽明一覽跡ハ可被返旨ニ候

一此大原狀三通先時到來傳上候

一加恩之事妍朝臣所存ハ相分り候へ共内公如何と存候宜御判考希上候

一昨日藤井入來本田御家へ參談と存候

一今朝長門守ハ禮使清水美作參上と存候愚家内人來候

右等申上候今朝陽明へ出頭彼是右言上延引御斷申上候也

六十八

御劔ノ事懸違延引御斷申上置候也

叟

固大公

内々

二六 大原重徳より中山忠能等宛書翰

文久二年六月十八日

増

御機嫌能可被爲渡令恐悦候抑昨日申立候今日爲御用談登城候處肥後守中務大輔

前守和泉守越前々少々所勞ニ付不能出席右五人面會黒書院大老之名目差支候ニ付談詰政事總裁

職ニテ大老同様御請之趣に候尤表立御請之儀ハ對顔ニテ直ニ可被申上旨

ニ候今日ハ先内々御請之模様不取敢從重徳令言上候且又一橋之儀ハ少々

入組不無理子細有之候ニ付今一應勘考可致旨に付其旨承置退城候此段宜

預御沙汰候也

六月十八日申刻認

重 德印

中山大納言殿

三條大納言殿

明日香井中納言殿

久世宰相殿

宰相中將殿

二七 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰及同返翰等

文久二年六月十九日

御安全奉賀候然ハ乍御面倒申伺候今明日 御機嫌伺可令參上と存候先年
ニ事一向不相分候 禁中計可參上哉と存候然ル處所勞平臥候間以名代可
伺申と存候夫ニ宜候ハ、必御答御無用希上候

一 廿三日參集無之様伺候へ共爲念相伺候

一 招請何時比御出哉伺候

一 松平大膳大夫御亭拙家等へ使差出度勝手問合ニ候何等之使ヤラ不相

分候御勝手伺度候

右等御面倒恐入候へ共同度如此候也

六十九

實 愛

中山殿

令拜承候御安全奉賀候併御不例之旨如何御用心專一存候扱今明日伺御機
嫌ニ事別ニ不參由に候間此度同様心得ニ候

一 廿三日參集彌不仕候已刻過比陽家へ可參入候

但太刀馬三折目六品入魂進入候積ニ候品入魂之義不苦候ハ、御申込

置希入候

一大膳大夫の御亭拙家へ使被差越候旨承候不面會義ニ候ハ、明日明後日何レニ亦も不差支候可面會義ニ候ハ、廿一日辰半ニ仕度候併前以名前格等承度候

右等荒々御受申入候兎角手痛難澁仕候亂書粗答可被免給候也

六月十九日

右中山自筆ノ答書草稿ニテ前書ノ返事

原朱

追不萬々期後便候也

去十日御登城濟之御狀拜見候追々向暑候益御機嫌克被爲在御安意可被上候貴公御安全珍重存候京師無別條御休意之様と存候扱御着府後十日之時儀等も委細被言上候趣逐一令披露候處先以御感御満足之御事ニ候貴公御配慮御苦勞之段宜申達御沙汰ニ決尙又追々御掛合宜御都合共御申

上之義相待申候仍御答如此候也

六月十九日

二白嶋津三郎ニも彼是周旋之旨深御満足被思召候御序宜御傳聲可有之候右等早々可申入候處所勞等有之及遲滯御理申入候也表向御狀ハ任例不及御答候也

忠 能
實 愛

左衛門督殿

二八 中山忠能上申書

文久二年六月十九日

長防御所置之儀者人心向背之機天下治亂之所分に候得者忌諱も不願毎々鄙見之趣建言仕候事ニ御座候處今般從御所可被處寬典旨被仰出爲天下感喜之至奉存候然ル上は速ニ御奉勅之御沙汰可被爲在筈と奉存候折

中山忠能履歷資料卷十 (文久二年六月)

三百四十五

柄彼方々歎願云々之御内諭有之就る者以書取申上置候次第も御座候得者當然之御措置も可被爲在と旦夕企望罷在候得共今以何之御沙汰も無御座此姿ニ御遷延ニ相成候者折角 朝廷に御寛大被 仰立候詮無之而已ならず重き 朝命御等閑被成置候態ニ相當り何共奉恐入候元來斯ル紛擾之時態ニ立至り候も畢竟於大義名分上人心不服之處有之ヨリ釀成仕候義哉と推考仕處尙又前條之御次第ニハ彌以輿論沸騰疑惑所積結局如何之御不都合を生し候も難量と深ク案煩仕候將又大膳父子士民共只管寛宥之御沙汰渴望仕居候場合前件 朝廷之 御沙汰既ニ一統に御布告ニ迄相成候上ハ定る傳承竊ニ 御仁徳を感戴仕一日三秋御沙汰相待居可申と奉存候篤と御反察神速 朝旨貫徹仕候様繰々不堪至願候彼是之次第登營之上委申上度心得ニ御座候得共生憎所勞ニ只様及遅引危急之時態寸時も不忍傍觀義ニ付大略楮上を以申上候恐惶敬白

六月十九日

名

幕府人差出ス

二九 中山忠能正親町三條實愛より大原重徳宛書翰

文久二年六月十九日

去十日御登城後御書狀令拜見候追々向暑候彌御機嫌克被爲渡御安心可被成上候貴公御安全珍重存候京師別條無之候扱御着府後次第十日之時儀委細御申上之趣逐一令言上候處 御感之御事ニ候貴公格別御配慮苦勞之儀と被思召候併御丹誠御勤仕之段 御満足之御沙汰ニ候尙又追々御掛合御應對之義共委細被 聞食度何も宜申達 御沙汰ニ決表向之御狀ハ先例ニ任セ別段御答不申入候仍早々如之決也

六月十九日

追々島津三郎ニも誠以彼是周旋之旨厚 御満足之御事ニ候御序宜御申傳可給候右等早々可申入之處所勞人等有之及遅滞御理申入候併相役五

人共無事御休意可給候也

忠能
實愛

左衛門督殿

右中山自筆之草稿原朱

三〇 庭田重胤より中山忠能宛書翰

文久二年六月廿日

追申大亂筆可被免候也

日々大暑ニ候倍御安全恐悦存候抑昨日ハ色々御面働恐入存候則今日若御用候哉參 朝候處御參之御様子ニても不被爲在候先退出仕候今朝別紙之通三條殿ハ申來候定之御打合之上御沙汰之事ト存候若御用候得者何時ニても出頭仕候間何卒一寸其節御示命願入候委曲三條殿思召ハ御聞取ト存候何も宜希入度存候仍右申上度何時ニても御用候得者早速出頭仕候何卒

御含宜希入度存候仍右言上迄如此候也

六月廿日

重胤

中山大納言殿

三一 岩倉具視より正親町三條實愛宛書翰

三通 文久二年六月廿日

急き用事而已申入候扱只今諸司代行向之事申來り候定之加増之事と存候實ニ驚入候次第に候如何之 思召ニ之ケ様之御運ヒニ至り候哉一身之所ハ元々申上候通り決之非役の向は御取除願上候事に候所過日申上候ハ只今右様之義共有之候ハ實ニ中卿御始甚以如何と存上候故かねて内々申伺候事ニ相違も無之事故 思召ヲ以何分從前不相濟候ハ、武傳へ可被達其上 上御沙汰次第と申願候事ニ候ケ様相成候ハ人口如何實ニ恐怖千萬之事ニ候於小子ハ殊ニ此比段々患難迫り居候所彌以是非なき次第ニ候得

とも元來如何被遊候思召ニや伺度昨冬ハ勿論當春來も吳々申上候次第尙
 又過日來格別御骨折之事深願上候事一身置所もなく心配候全く右有之候
 事故今度若州御憐愍御沙汰杯可申存候扱々歎息之事ニ候御面働恐入候得
 共御決定之所又臣願置候邊如何被遊給候事哉得と伺度存候
 明日尊卿ニハ御行向哉中卿ニも被行向候哉
 所勞名代尤家老ニハ六ヶ敷候事と存候
 實ニ數人どうく諸司代行向此節之事實ニ目ニ立候事如何御勘考不被爲
 在候哉偏ニ御方略希上候
 過日來毎々願上候所ヶ條ニ御所置ニ相成候ハ、一應被仰下候ハ、又々申
 上候義も有之候所明日之今晚實ニ無致方と存候御憐察希上候
 右言上早々如此候也

六月廿日

富 妍

成 公

拜承致方も有之候得共小子即案ニハ明早朝武傳へ今日誰々達之義有之諸
 司代亭へ行向申來り候旨右各今日無據御用之義有之候間今日之所延引可
 致候但し兩卿ニハ行向子細承り可來候とすつはり被 仰候而和朝臣早々
 召候て浪士段々不容易事共申唱候間實ニ御心配ニ思召候間右臨期ノ所置
 ヲ以武傳へ凡るたくし候様内々とは申なから一旦被 聞食候ニ無違事元
 々起り之所若州ハ内々申上候ニ無之嶋多小子申候故歸京其旨申上候夫故
 若沙汰有之候ハ、内々爲見候様被 仰出候事ヤと存候左候得は若ハ六サ
 と申上候事ニハ無之無據内々言上ニ相成候名聞有之候事又右内々急度御
 沙汰ニても是以其利有之候事と存候せめてハ右ニ相成候丈ニハ是非く
 希上候若々是非行向に候ハ、せめてハ御用濟次第と申様之者にてテラホ
 ラニても可行向哉實ニ御勘辨專務と存候宜敷希上候也

六 廿

富 妍請

右認候處へ中卿御返事拜見何之事ヤラ扱々長大息如何之對談被致候事哉
其上此次第ハ何事ニ候哉實に不都合千萬甚以不得其意事ニ仰天仕候臣
終身遺憾ニ候殊彌患歎も覺エ申候今夕御文通之事又かねて若州召トヤラ
御憐愍トヤラ被 仰出候迎中卿始ヲ浪士刺杯ト申居候事殊ニ小子ハ嚴重
ニ申立候杯右ニ兩條千草へ御申給候てよろしく夫迄之事ハ御申無之様希
上候早々以上

六 廿

富 妍

極々秘中秘

三二 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年六月廿日

只今妍朝臣も此通り被示候何様甚以當惑千萬ニ候御返事ニ趣ニ仰ハ明
朝讀師故御斷切御所存御申述候旨承候御一個ハ夫ニて御宜敷哉ニ候へ共
一同ニ處も甚困入候若哉今日披露も相濟右ニ運ヒ候事哉と存候左候へハ
明朝讀師御參右ニ次第御申上給今朝夫々申達し候事何分ニも可見合旨急
々武傳へ被 仰出候様御取計希入存候左様無之ニハ甚一同六ヶ敷と存候
妍杯心痛危殆ニ事過日本田ハ伺候邊専ら相起り有之候此矢先加増ニハ
實々心配ニ事ニ候何卒一同此難ヲ避候事ハ明朝急々 勅命ヲ以可見合武
傳へ被 仰出候ハ外無之候若哉今日披露なしに右ニ通相成候事ニもセヨ
上ニも御傳聞御心痛ニ被 仰出候趣ニ是非ノ希上度候兼て妍ハ被申
上候邊事ハ未御申上無之哉左候へハ 上ニハ御承知も不被爲有候へ共事
急ニ相成致し方も無之此段願上候右ニ邊御六ヶ敷候ハ、賢慮御決定御申
立振伺度存候也

六 廿

叟

固 大 公

急用

三三 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年六月廿日

今朝御面働申伺恐入候事ニ御細教畏入存候岩へ達置候加恩之事昨日御示
通り御同心存候宜奉願上候仍右言上如此候也

六月廿日

實 愛

中 山 殿

三四 一條忠香より中山忠能宛書翰

文久二年六月廿一日

日々暑氣相加候彌御安全令賀存候扱明後廿三日近衛前左府公關白宣下ニ
付忠香ニも参り吳との頼ニ候父子とも目出度歡ニ行向庭上見舞等参上ニ
覺悟ニ候且今日鷹司前右府公被來候申置ニ被歸候定明後日近衛家へ
も被參候哉と被存候右ニ節座次ニ處先比御尊有之候通りニ相心得居候
可然哉還俗後ニ處ニ相違ニ邊も有之候事哉爲念心得置度存候儘御面働
なから今明日中ニ伺置度存候先比ニ通ニ別ニ相違無之候義ニ候ハ、別
段御書付ニも不及申候何も荒々如此候也恐々謹言

六月廿一日

忠 香

中山大納言殿

内々御答伺度候

猶々御用繁中御面働ながら宜く希度存候關白 宣下惣九條殿下 宣
下之節ニ心得ニ行向候覺悟ニ候

三五 專想寺祐眞より中山忠能宛書翰 文久二年六月
白杵城主稻葉伊豫守勤 王忠義相違無御座候萬一之時必御下知可被下候
以上

文久二年六月

專想寺

祐

慎花押

中山尊大前

王座下

三六 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰 文久二年六月廿一日
拜承仕候御不例之處押御參御苦勞奉存候扱一條一品御談之振合被示聞
敬承候行向子細表向言上候様との御事扱々難有奉存候右ニ付三ヶ條各拜

承候

- 一伺 思召候上否可申入之條至當哉ニ奉存候拙子ニも右之分ニ仕度候
- 一畏御受之輩御捨置ニハ何歟差異有之如何と存候言上御禮申上度伺候
- 徒同様被 仰付候方哉と存候元來稀之事一個ニ御受ハ無之筈ト存候旁
- 御捨置候段如何存候
- 右御答申上候
- 一富妍大息事承候先時入來申承候事ニ候先日來被申上置候邊違却之處と
- 存候併言上無之今日之次第ニ成候事同朝臣不存知故と存候晝後參 内
- 之由被申居候御面談も有之候半と存候
- 一今朝本田來談扱々時勢六ヶ敷存候所司代一條困入候事共ニ候萬々期拜
- 面候
- 一今日之處厚 御憐愍御取計御名義も相立一同節義も相立候事と畏入候
- 御周旋之段畏入存候併御不例中御苦勞恐入存候何も期拜面候也

六 廿一

實 愛

中山 殿

三七 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年六月廿一日

追申不伺輩迄も各被召集本文之邊被 仰渡候ハ、難有奉存候實ニ所勞
中苦心扱々困苦之至ニ候宜願入候也

加一件實ニ苦心ニ不堪候間不願恐以一封 上へ奉歎願候處何共御時宜未
相分候故無是非名代高松差出し候定而申達可有之左候ハ、下官へ被申達
候様申談置候 下官へ被達候ハ、 叡慮可奉伺候其上領掌否可申答内存ニ
候窺 叡慮候ハ、斷然と 御沙汰被爲有候而右ハ是非共先今暫可預置或先
關東へ可 旨今日即時ニ被 仰出候様願度奉存候唯今之處ニ而ハ何國迄も
返却歟 右難申請存候 上へ御差留被遊候ハ、御名義も相立難有奉存候其功も無

之受重賞候譯無之故一分辭退候亦も宜候へ共恐ラク難相立甚心配仕候セ
メテノ御憐愍御取計右之段被 仰出候様希上度候恐入候へ共又候 上は
も右之段奉歎願候事ニ候此段希入試候也

六 廿一

只今本多并長人等來所司代召留ノ浪士有志大蜂ニも可相成哉右ハ二
三ノ堂上所爲故可相除段申唱へ候由致方も無之事ナカラ實ニ汚名萬世
ニ殘し候事ニテ難耐事ニ存候厚御勘考希入候所勞平臥亂書高免御慈扱
奉仰候也

叟

固 大公

極々内々

三八 正親町三條實愛中山忠能往復書翰

文久二年六月廿一日

追申 小子飛久等ハ伺 思召之上否可申入方ニ令治定候也

過時者御兩封拜見候御不例御自愛專一奉存候扱二條行向一件何も先時申入候通ニ取計候一品參 内精々申談候へともモハヤ行向候人々も可有之一品も出門之處ノ由ニテ大當惑何分子細御推察計ニテ被止ノ義ハ如何敷被存候間各行向子細承候上之事ニ被致度旨強被申候間無據言上仕候處何分時刻も過候事無致方被思召候間行向ニテ子細表向言上候様との御事ニ相成候

一分ニテ所存ヲ述理切候輩

加筆カ 此徒ハ右理切候段ヲ 上へ言上ノ積

一 邂逅之義一分否難申候間伺 叡慮候上否申入候由申述置思召ヲ伺候輩

加筆カ 此徒ハ武傳へ自 上此儀ハ少々 思召も被爲在候間今一應御沙汰有之

候迄ハ延引之様宜申達ト傳ヲ以所司代へ被 仰出ノ積

一 於所司代畏御受申切候輩

加筆カ 此徒定て 上へ言上御禮も可被申上候此分ハ夫ニテ被捨置候方ニ候哉

又ハ 思召被爲在候間 叡慮伺候徒ト同様ノ御沙汰ニ相成候モノカ

右此狀中へ御加筆ニ被賢慮早々可被仰下候痛所一向強く大困候へとも押出仕少々かたヲ付置可退出候間乍御面働早々申入候也

六月廿一日

右一紙ノ中加筆 富妍書類再三披見候愚札ヲ御見せ之御様子大歎息之趣アレハ何ヲ長歎

息ニ候哉一圓合點不參候全體何か大困窮急迫之様子ニ相見申候トウテ

カ、ル世之中ニ候間色々疑惑之説も可有之候へとも何分不知ハ知ラス

ト仕御趣意相立候様計候外ハ無之ト存候困入候時勢候へとも間違之説

ハ自然と可散事ト存候也

上 忠 能 公

實 愛

下 三 條 大 納 言

内用

右本文中自筆 答書嵯峨ノ自筆原朱

三九 加増の件思召の書取草稿四通 文久二年六月

内府

一 位 中山大納言 三條大納言

飛鳥井中納言 久世宰相

右宰相中將 千種少將

岩倉中將 中務大輔

以上家祿加増之儀於若狹守役宅申渡候ニ付存意尋之旨右者聊所存有之ニ付今一應致沙汰候迄ハ必延引有之候様武邊ハ早可申達事

但自本人ハ別段不及申達ト存候事

少々所存トハ別義アラス今日之義ハ和宮縁組ニ付之加増等と存候右ハ

舊年已來申候通和宮兼約之義共關東大奥ニ乖違背之事共有之毎々歎息も申來朕ニも深以不安心心配候事共ニ候處表方ニハ萬事都合宜ト而已唱如今日加増之沙汰迄ニ及候てハ内外之取計相違且和宮先件違約之邊ハ尙又追々及應對候積故右等加恩ヲ受候輩ニてハ依事應對も致兼可申哉ニ付旁此方安心迄ハ延引致度内存候

右中山自筆ノ草稿原朱

令一覽候尤申出候了簡之處少シ關白ト話合之義有之候實ハ出願を侍居候事ニ候處即出願幸可申付候然處武傳退出之由明日にてよろしくや鳥渡尋候事

尤話合是ト申事にてハ無之候事秘く

右中山自筆ノ寫

內府
 一位
 三條大納言
 飛鳥井中納言
 久世宰相
 千種少將
 岩倉中將
 中務大輔
 大典侍
 新大典侍
 長橋
 少將內侍
 衛門內侍

以上家祿加増并送物之儀於若狹守役宅申渡候ニ付存意尋之由右者所存有
 之ニ付見合相成候様早々武邊ヨ可申達事

但自武邊相渡候書付各返却候尤自本人ハ沙汰不致方宜ト存候事

右宰相中將

右者

和宮由緒ニ付加増之旨ニ付申渡之通ニ亦も無所存候事

右筆者不分明原朱

內府
 一位
 三條大納言
 飛鳥井中納言
 久世中將

右者 和宮由緒ニ付加増之旨ニ付申渡之通ニ亦も無所存事

千種中將
岩倉中將
中務大輔
大典侍
新大典侍
長橋
少將内侍
衛門内侍

以上家祿加増并送物之義於若狹守役宅申渡候ニ付存意尋之由右者所存有之ニ付見合ニ相成候様早々武邊へ可申達事

但自武邊相渡候書付各返却候尤自本人は沙汰不致方宜ト存候事

右中山自筆ノ草稿朱原

所存トハ別義ニアラス今日ノ義ハ全ク 和宮縁組ニ付テノ事ト存候右ハ先達々申候通 和宮兼約之義共關東大奥ニテ違背之廉共有之毎々愁歎も申來實ニ深心配之至候處表方ヨリハ唯萬事都合宜ト計申唱既ニ加増等之沙汰迄ニモ及候義實ニ内外之取計相違ニ候尤先件違約之義ハ尙又追々爲及掛合候積ニテ方今安心ト申場ニハ更ニ無之候故右申候事
右中山自筆の寫朱原

四〇 大原重徳江戸着の景況

文久二年六月

一大原左衛門督様六月七日品川宿々傳奏屋敷貳之御殿に御着壹之御殿へも掃除等致し御座敷出來相成居申候是者追々之御用談席ニ亦も相成可申哉と申居候

一品川宿の御馳走人分部若狹守様家來之者共御迎として罷出居候所大原様を御内々之御達之趣ニ御馳走役之重役の申聞候趣若し途中ニおいて外國人上馬等ニ乘打致し候ハ、追懸け切捨可申旨御達ニ付誠ニ重役共仰天驚入申候夫故途中の異人見分として段々人數差出置申候

一尤外國奉行の夫々の異人も今日者高官之貴人着ニ付罷出不申候相達申候趣ニ御座候

一御馳走人役々の者御着之上者誠ニ大安心致候よし

一御馳走人の家來之者の相達此度薩州公御家來御供仕被下候ニ付不作法無之哉入念可致旨達之

一翌八日松平春嶽様五ツ時ニ御屋敷の上屋敷に被爲入御待受被成候島津三郎殿御逢として罷越申候御供立金紋先箱對之鑓貳本黒フ三毛徒士八人駕籠脇拾四人跡箱金紋二ツ簀箱金紋茶辨當虎之皮馬一匹跡乘二騎供鑓三本
右之通御供立ニ御坐候

一御對顔相濟候上者御用談として度々御登城有之候よし

一大原様御駕籠脇御徒薩州様御家來打交り御供仕候

一島津三郎殿高輪屋敷ニ御出事

大目付

伊澤美作守
駒井山城守

大目付

外國奉行兼帶

大久保越中守

御作事奉行格

御目付

松平備後守

御目付

神保伯耆守

淺野伊賀守

藤澤九大夫

川勝縫之助

御政事向御改革 御用可被相勤候

右之通五月廿二日 付此段も申上候御覽之上御火中可被下候

四一 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年六月廿二日

日々酷熱難堪候處彌御安全恐賀候併御痛所如何被爲渡候哉御用心專一奉
存候扱昨日ハ意外之儀ニ而段々御苦勞存外夜分も遅ク相成嘸々御困殊ニ
苦熱等實ニ御察申入候定而御疲勞と奉恐察候扱一條も 御憐愍御所置ニ
相成一同實以難有安心畏入候
上御名分も正敷下一同節義も相立扱々難有畏入候事ニ候全 御仁惠實以
畏存候就テハ偏ニ御厚配何共千萬畏入存候先御禮不取敢申上候昨夜速ニ
申上度存念之處初更後ニも相成却而御疲勞之處御面倒哉共恐察差控及今
朝廷引不本意恐入存候萬々猶期拜謝候先ハ早々如此候也

六月廿二日

二白返々段々御周旋實ニ御草臥彼是御心配等奉察候程克御取計不堪感佩畏入存候實以安心畏存候何も拜面御禮共可申述候早々亂書高免奉仰候也

叟

固 大 君内々

必々不奉煩貴答

四二 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

文久二年六月廿二日

御細章令拜讀候愈御安泰奉南山候併御痛所御不工合之由定之昨日御動と存候折角御保愛奉禱候 賤恙毎々御芳訊畏入候何分兩三日之酷暑邪氣散兼自然ト總體不工合今日も打臥居候仕合甚以恐入候然ハ昨日意外之義相發實以苦心候處程能御取計ニ相成夫々至當之御所置感伏畏入候事ニ候萬事御心配御周旋之程千萬恐察候事ニ候存外おそく相成定之御困苦奉察候實

々御勞煩之段恐入候乍去安心仕候事ニ候段々御念示恐入承候明日陽家音物

太 刀 馬 折 紙

右御贈但音物御入魂ハ從小子可申入旨承存候辰過使差出し候間其砌申置候様可命候 拙子明日迎も難令出仕候無據不參候

一長門中將書面拜見返上候 拙子到來狀入御覽候

一一刀猶近邊故今日中爲見可申候今夕明辰過之内可令返上候

一長門返狀之事承候過日返書未遣候右使者直ニ國許へ引取候間跡と存

未果候猶御相談申伺度候

一所司代御沙汰ニ被召留候旨風聞諸浪士以外暴論甚敷もはや致方無之故君側之奸徒片はしを不殘刺除候旨申唱へ候由昨日本多も來談其餘長藩又浪士兩人來談昨日大弱中なから難差置實々平臥同様ニ面談候事ニ候堂上中奸物數人有之由定之御互も其内と存候併其中ニ三奸有之

候由右ハ千岩富三朝臣之旨ニ候先此徒ヲ第一刺と申説頻ニ申唱ヘ候少
 將衛門兩内侍ノ事も段々申居候いかにも汗 聖徳候儀共甚恐入心痛之
 事ニ候何レ果斷無之ハ必可暴發哉と存候間今朝陽公へ一寸申入置候
 何卒御一考希上候間違之事も有之夫ハ氷釋仕居候へとも總體ハ中々教
 諭不用候とふか皆々其基源ハ内ウラカ火ヲ出し候様ニ聞ヘ候全クハ妬
 心も加り有之哉と存候可歎時勢ニ相成候
 右任便苦心之儘申上候宜御勘考希上候也

六月廿二日

叟

固 大

公御返事
極内々

四三 攘夷言上書

文久二年六月廿二日

内密奉申上候覺

外夷之性質姦詐詭譎甚辭命にハ世界一視同仁之大義を相唱へ漂流難破船
 憐愍致し開港して自他國の便利宜しからしめ通商して有無を通し同じく
 此民の急困を救ふべき旨を表に致し候得共其實は天地の大經常理に戻り
 畢竟海賊偷盜之業ニテ人の國を奪取り他國の資澤を吸取りて其本國の
 饑寒を救ふにあり癸丑以來十年之内初の誓約とニ黑白之相違にて今日に
 至りては既ニ下愚凡俗のものといへとも其大姦計あることを知れり又天
 下諸國衣食の品乏しく饑寒に苦しむに至れば士民公然として諸有司を罵
 り醜言至らざる所なし乍恐伏して奉伺 天朝 御廟議弘化之頃よりも武
 家傳奏卿を以て 叡慮を關東に達せられ諸大小名を御警戒なされ候得共
 幕吏 明詔を廢格し天下に達せず其後癸丑の夏に至りて果して墨船相州
 浦賀に濫入し國法を破り翌年於横濱幕吏と盟約し遂ニ下田長崎箱館の三
 港を開く約條を相定むる事となれりそれより魯英の諸夷も同じく條約取
 結ひ多事云ん方なし又候巳年に至り墨夷江戸登城全國中にて十港を開き

夷人自由ニ住居致し耶蘇寺を建て又國中夷人勝手に徘徊貿易致へきなどの條目申立候得者癸丑の歲墨夷使持參之國書ニ載たる趣とハ氷炭の相違ありされとも幕吏姑息因循して唯夷人之規望するに任セ敢て回挽の謀聞へす然ルニ午春東使堀田備中守上京懇願あり三月七日 朝廷御評議之趣傳へ承候ニ當 御代ニハ蠻夷和親に及候儀ハ如何ニも 神國汚穢御瑕瑾の程 神宮御始御代々ハ奉對深歎 思召候ニ付右 叡慮を以萬民之所存被 聞食度候間諸大名之建白被爲召候との御達あり又同三月廿日於小御所 關白殿三公議奏カ曹傳奏カ御立會にて備中守へ被 仰渡候每文言之内ニも往年下田開港之條約不容易之上今度假條約之趣ニテハ 御國威難立被 思召候且諸臣群議にも今度之條々殊ニ 御國體ニ拘り後患難測之由言上候猶三家以下諸大名にも被下 台命再應衆議之上可有言上被 仰出候と相見へ同月廿六日廣橋殿萬里小路殿裏松殿御行向ニテ備中守ハ御渡し被成候御書取にも去廿二日書取之趣及言上候處今度之條約逆も御許容難被

遊 思召候衆議中自然差違候時ハ先件之御趣意を合精々取鎮メ談判之上彼ハ及異變候節ハ無是非義と 思召候故 叡慮之旨相立候様頼 思召候間差合御取計可有之候事又下田條約之外ハ御許容不被遊候節ハ自然及異變候も難計候ニ付云々とも有之同年六月廿三日石清水奉幣公卿 勅使有之其宣命之内にも 皇威ヲ輕侮リ國澤を奪取むとすとも相見へ又弘安の度にも夷狄征伐の威徳を顯し賜ひ千歳の令ニ大 御光の耀輝ます也と明也故ニ今慎て 祖宗の道を道として深く 叡慮を凝し初明神カの冥助を祈申賜むとも有其八月八日の 勅書に内整外夷之侮不受と遊はし又同月十五日石清水放生會 宣命辭別氏申久蠻夷等和好爾託氏皇國乎謀止良牟構布留古止罷須其狀態乃驕傲留奈皇威乎侮利神州乎汗須乃太甚岐已爾國家乃大患利奈如是利在汚穢禍乎受波人民乃不安乎奈何毛加爲止牟夜爾日爾深久 叡念乎惱万賜布志故茲爾闔國人民乃心志乎齊志布忠誠乎盡志更爾神明乃威徳爾頼爾非留與何波止此汗穢乎洗滌久古在牟良大菩薩此狀乎平久安久聞食氏垂跡擁護乃神託爾